元吸血鬼の魔道士生活（休息中）

チート程よくその２

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元吸血鬼の魔道士生活（休息中）

【作者名】

チート程よくその２

【あらすじ】

雑魚と思い油断して、捕まったショウブ。力も抑えられ、八方塞。

「こんな所で死ぬのか…」

そんな絶望的状況で親友の神様である神楽に逃げ出す方法があると言われ、ショウブはそれを承諾した。目覚めた時には人間になって知らない土地いた

気が向いたら投稿していきます

説明（そのうちふえると思います）

名前：ショウブ
種族：人間（元吸血鬼＆神）
能力：原子を操る能力（あんま使わん）
身長：中学二年の男子くらい
ギルド：妖精の尻尾
元吸血鬼のため、朝に少し弱い。しかし、身体能力や霊力、妖力、魔力は健在、普通の人間より回復スピードが速いため油断すると負ける。不老不死である（なお少女などにモテルもよう）
式神達はドラゴンクエストの世界の魔物達である。なんで持ってるかって？昔神楽と玖音が無茶して異世界への門を開いてしまったからその中に入ったらドラクエの世界だったというだけである。
同じようにグルメ界の門も開いてしまったのでついでに式神を連れてきている。門はそのまま。旨いもんが食えるからである。
周りより少し身長が小さいのを気にしている。髪の毛が黒だか白だか灰色だかよくわからない色になっている。クトゥルフ関連の物を玖音、千尋、神楽と共に回収、管理している。今持っているクトゥルフ関連のものは「ネクロノミコン」、「無名祭祀書」、「グラーキの黙示録１巻～１２巻」

アクノロギア
大昔に、竜に滅竜魔法を教えてもらった人間の一人。時が経つうちは竜を滅ぼすようになった。
この作品では戦いたかっただけである。属に言う戦闘狂。現在はシ

ョウブの式神の一人。大魔闘演武に向けての合宿ではギルドに置いて行かれた模様。

黙示録の龍

聖書に載る竜。七つの首を持ち、王寛を被っている赤い竜。ほかも含め自分の作品内では玖音、ショウブ、千尋、神楽が生み出してしまった竜となっている。ぶっちゃけアクノロギアの代わりである。

転生しました

・・・

ショウブ「（俺も…もっと皆で…楽しみたかった。もう…幻想郷の皆とは…会えないのか…残念だな）」

ショウブは急に血を吐いて倒れた。その時、ドアにぶつかってしまい、ドアを倒したまま倒れてしまった

「きゃ！！」

ショウブ「（吸血鬼から…人間になったんだ…体にはかなりの負担がかかるはずだ…こんな所で死んじまうのか…ずっと恐れられてきた妖怪が…無様もんだ…）」

「あ、あの…どいてくれませんか／／／／」

ショウブはそのまま意識を手放した。その直前、ショウブは少女の声が聞こえた気がした

・・・・・・・・・・・・

ショウブ「ん……生きてるのか…？」

ショウブが目を覚ますとベットの上だった。服装は民族風の服になっており、近くには青い髪の少女と白い猫がベットのそばで寝ていた。

ショウブ「…まだ体がダルイな。もう少し寝てるか」

ショウブが寝ようとした時、少女が目を覚ました

少女「ん……あっ、よかった。目が覚めたんですね」
ショウブ「君は昨日の…」
ウェンディ「私はウェンデイ・マーベルです。この子は「シャルルよ」あ、起きてたんだ」
シャルル「さっき起きたばっかよ」
ショウブ「俺はショウブだ。所でここはどこだ？」
ウェンディ「マグノリアにある妖精の尻尾の女子寮にある私部屋です。昨日急に倒れ込んできてびっくりしたんですよ」
ショウブ「それはすまなかった。急に人間になって体が持たなかったんだ。そんなことよりその妖精の尻尾に連れてってくれねえか？」
ウェ「あ、はい。ついてきてください」

・・・・・・・・・・・・・・・
ウェ「おはようございます。マスターはいますか？」

周りから視線が集まった。なにやら小声で話ているのもいる。ショウブが周りを見ていると小さい爺が歩いてきた

マスター「おう、男を連れてきたようじゃな」
ショウブ「あんたがマスターか？」
マスター「ああ、ワシが妖精の尻尾マスターじゃ」
ショウブ「俺はショウブだ」
マスター「あいつは家の看板娘のミラじゃ。では本題に入るとするかの。まずお主はなぜあんな服ボロボロ

のを着ていた？」
ショウブ「知らん。気が付いたらあれだった」
マスター「では、どこからやってきた」
ショウブ「幻想郷だ」
マスター「幻想郷？」
ショウブ「結界で隔離された世界、幻想郷。そこには人、妖怪、妖精、神、いろいろな種族がいる」
マスター「なんかどこかで読んだきがするのぉ…」
ショウブ「それで俺は、ヘマをしてな。妖怪に捕まったのさ。あいつ等は大妖怪である俺が気に入らなくて殺しにきたのさ」
マスター「なんと……」
ウェンディ「ひどい……」

周りがざわめき始めた

ショウブ「んで俺は自殺するしかなかった。俺はさすがにあんな最期はごめんだからな、なんとか逃げ出す方法を考えてた。倒して逃げるのも考えたが数が多すぎてとてもじゃないが無理だった。
そしたら親友の神様が来んだ。ここから逃がしてやるって。俺はそいつに頼んだ。その瞬間俺の意識は途切れた。気がつくと人間になっていてマグノリアの外れにいた。俺はそこの桜髪のやつの声を聞いてここまできた。後は知っての通りさ」
マスター「……そうか。ところでショウブは大妖怪といったな。どんな妖怪なんじゃ？」

ショウブ「吸血鬼だ」
マスター「なんと…」

再び周りがざわめきだした

マスター「…なぁショウブ、お主、妖精の尻尾に入らぬか？」
ショウブ「別に構わないがどうしてだ」
マスター「このギルドの者は全員なにかしらの事情があるのじゃ。だから方っておけなくてのぉ」
ショウブ「そうか、わかった。帰るまでの間は妖精の尻尾にいさせてもらう」
ミラ「うむ。ギルドの証としてギルドマークを入れるがどこに何色でいれる？」
ショウブ「じゃあ……」

ショウブはウェンディが目に止まった
ウェンディ「…へ？どうかしました？」
ショウブ「右肩に水色のギルドマークを入れてくれ」
ミラ「ふふ、それじゃあ肩を出してちょうだい」
ショウブ「わかった」
ミラ「…これでよしっと。あなたもこのギルドの仲間入りよ」
ショウブ「それはいいがさっき変なこと考えなかったか」
ミラ「きのせいよ」
桜髪「おい！！俺と勝負しろ！！」
ショウブ「ミラ、こいつは？」
ミラ「ナツよ。ナツ・ドラグニル」
ショウブ「よし、それじゃあナツ。表でろ」

ナツ「いよしゃーー!!!」

・・・・・・・・・・・・

ナツ「へっ、新入りだからって手加減はしねぇぜ」

ショウブ「むしろ全力でこい」

ナツ「言うじゃねぇか。火竜の咆哮!!」

ナツが口から炎のブレスをはいた

ショウブ「酸素よ!!」

《ドカーーン》

ショウブは酸素を集めて爆発させることで防いだ

ナツ「火竜の鉄拳!!」

ショウブはカードを取り出した

ショウブ「妖精「スーパーウンディーネ」」

そうショウブが宣言すると水のドラゴンが龍が現われ、ナツに向かって飛んで行った

ナツ「火竜の剣角!!」

ナツは全身に炎をまとってドラゴンを消した

ショウブ「へえ、炎で蒸発させたのか」
ナツ「まま、まあな、はははははは…」
ショウブ「なんだただの偶然か」
ナツ「んだと～！！！！滅竜奥義、不知火型…」
ウェ「ナツさん！！それ使っちゃだめです！！」
ナツ「…紅蓮鳳凰剣！！」

ナツ繰り出した技は先ほどの火竜の剣角とはけた違いの威力と速さだった。しかしショウブは軽々と避けてしまった

ナツ「なっ！！」
ショウブ「俺は元吸血鬼だぜ。なめちゃいけねぇ。それにしても今のが全魔力だったようだな。んじゃ、そろそろ終わりにしようか」
ナツ「だ～！！俺はまだやれるぞ！！」
ショウブ「かりるぞ紫。廃線［ぶらり廃駅貨車の旅］」

ショウブはスキマを開くと電車をナツに向けて飛ばした

ナツ「ぬわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
ショウブ「俺に勝とうなんざ後千年早いんだよ」
マスター「勝者、ショウブ！！」
『『『うおおおおおおぉぉぉぉぉぉ』』』
ウェンディ「ナツさ～～ん！！」

ズキン

ショウブ「（今の…いやないな、うん。いくら俺がなぜかロリに好かれるとは言えこれはありえないうんそうだそうに決まってる）」

ショウブの魔道士生活は続くのだった

S級魔導士昇格試験

・・・・・・・・・・・・・

ショウブは一月前ギルドに入り、平和な日々を過ごしていた。家に関しては適当な場所に穴を掘って自給自足生活をしている。女子寮の近くにあるためウェンディがよくおすそわけにくる。ちなみに女子寮に近いのは、いい土地が女子寮付近にしかなかったからである。そんなことをしていると…

ルーシィ「……と言う訳なのよミラさん！！！　カナってば理由も言わないし！！！」

ギルドのカウンター席で、慌てた様子でミラに訴えるルーシィがいた。先日、自宅でシャワーを浴びていたのだが、浴槽にはいつの間にか、同年代の中では一番の古株であるカナ・アルベローナが浸かっていた。最初は驚いたが、ナツたちの度重なる不法侵入ですっかり慣れてしまった為、すぐに落ち着きを取り戻し、そのまま一緒に風呂に入ったのだ。だがその際のカナは元気がなく、どうしたのかとルーシィが尋ねると…

カナ「私……ギルドをやめようと思うんだ」

言ったのであった。そして現在、ルーシィはその言葉の真意を確かめるためにミラに相談を持ちかけたの

である

ミラ「クス」

しかしミラは特に慌てた様子も無く、グラスを磨きながら微笑む。

ミラ「大丈夫よ。この時期になるとカナはいつもそうやって言い出すの」

ルーシィ「ええ！！？」

あの意味深な言葉が毎年の事とは思わず、驚愕と同時に少し安堵するルーシィ。すると…

ナツ「仕事仕事ォ～！！！！」

ハッピー「あいさ～！！！」

ルーシィ「ちょっと！！　仕事ならあたしも…」

ナツ「悪い！！　この時期は1人で行くんだ！！！！」

そう言って、ナツとハッピーは妙に張り切りながら仕事へと出かけていったするとそんなナツと入れ替りで、グレイが仕事から帰ってきた

グレイ「ただいまァ！！！！」

ルーシィ「おかえり！　グレイ服は？」

グレイ「それどころじゃねえ！！　次の仕事だ！！！！」

今さっき帰ってきたばかりだと言うのに、グレイはさっさと次の仕事に出かけてしまった。上半身裸で。

「仕事仕事～！！」

「うおおおっ！！！」

「オイてめえ、それはオレが先に…」

「知るかよ！！」

「どけやたわけがっ！」

「「チームシャドウ・ギアはこの時期解散だぁ！！！」」

すると仕事の受注の為に受付係であるミラジェーンのもとに多くのギルドメンバー殺到する。その全員が、何やら鬼気迫るような顔付きをしていた

ルーシィ「何事なの～～？」

ミラ「時期にわかるわよ」

戸惑うルーシィにそう言いながら、ミラジェーンは受付の仕事を進めていた。ショウブも密かに楽しみにするのであった

・・・

マカロフ「妖精の尻尾古くからのしきたりにより、これより、S級魔導士昇格試験出場者を発表する」
『オオオオオオオオッ！！！！』
ルーシィ「S級魔導士昇格試験！！？」
ナツ「燃えてきたぞォーーーーーーー！！！！！」

ギルドメンバーは歓声を上げ、事情を知らないルーシィ達は驚愕した。

マカロフ「今年の試験会場は、天狼島。我がギルドの聖地じゃ」

再びギルドメンバーからと歓声が上がる。それを聞きながら、ルーシィは近くにいたメンバーたちに問い掛けた

ルーシィ「試験って何するの？」
「それはもちろん毎年違うけど」
「ハードな事には変わりあらへんな」
「なんせ合格者はS級魔導士に昇格だからな！」

ルーシィの問い掛けに答えたメンバーもやる気に満ち溢れていた

マカロフ「各々の力…心…魂……ワシはこの1年見極めてきた。参加者は8名」

「ナツ・ドラグニル」

ナツ「おっしゃあ！！！！」
ハッピー「やったねナツ！！」

「グレイ・フルバスター」
グレイ「やっとこの時が来た」

「ジュビア・ロクサー」
ジュビア「え？　ジュビアが？」

「エルフマン」
エルフマン「漢たるもの、S級になるべし！！！！！」
リサーナ「頑張ってエルフ兄ちゃん！」

『カナ・アルベローナ』
カナ「……」

「フリード・ジャスティーン」
フリード「ラクサスの後を継ぐのは……」

「レビィ・マクガーデン」
レビィ「私……とうとう」
「「レビィがキター！！！」」

「メスト・グライダー」
「メストだ！！」
「昨年は惜しかったよなー」

以上……8名の参加者が発表された。

ルーシィ「そっか……このメンバーに選ばれたいから、みんな自分をアピールしてたのね」

ウェンディ「うわぁ♪　みんながんばれー！」

ようやく先日の慌しい仕事ラッシュに合点がいって納得したルーシィと、選ばれたメンバーに声援を送るウェンディ

ショウブ「くそ～、そうだと知ってたら仕事に行ってたのに～」

ウェンディ「来年がありますから、えっと、気を落とさなくてもいいと思いますよ」

ガジル「な…なぜオレが入ってねえんだ……ジュビアが入ってんのに……」

マカロフ「今回はこの中から合格者を1名だけとする。試験は一週間後、各自体調を整えておけい」

「1人だけ！！？」

「本命はフリードか！？」

「メストだろ」

「ナツとグレイもいんぞ」

マカロフの言葉に、再びメンバーたちがざわつく。

マカロフ「初めての者もおるからのう、ルールを説明しておく」

ミラが試験のルール説明を始めた。

ミラ「選ばれた８人のみんなは、準備期間の１週間以内にパートナーを１人決めてください」
「パートナー！！？」
「２人１組のチーム戦って事だろ」
「仲間との絆、それも試験で試されることの１つなのさ」
エルザ「パートナー選択のルールは２つ。１つ、妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーである事。
２つ、Ｓ級魔導士はパートナーにできない」
リリー「つまり、エルザやミラジェーン、ギルダーツとはチームを組めないという訳か」
ウェンディ「エルザさんと一緒なら最強すぎるもんね」

エルザの説明に、リリーとウェンディが納得の声を上げる。

マカロフ「試験内容の詳細は天狼島についてから発表するが、今回もエルザが貴様等の道を塞ぐ」
『ええ～～～っ！』
ミラ「今回は私も、みんなの邪魔する係やりまーす♪」
『えええ～～～～っ！』
ギルダーツ「ブーブー言うな。Ｓ級魔導士になる奴ァみんな通ってきた道だ」

「にゃっ！？　ちょっと待って…」
「まさか…」
「ギルダーツも参加するのか！！？」
エルザ「さらに、ショウブの実力はギルダーツにも勝る、よってこの瞬間ショウブをS級魔導士にし、今回の試験管を勤めさせてもらう」
『えええ～～～～～～っ！』

ギルダーツも妨害役として参戦すると聞き、選ばれたメンバーたち（ナツ以外）は戦慄する。

「選出された8名とそのパートナーは、1週間後にハルジオン港に集合じゃ。以上！！！！」

最後にマカロフがそう締めくくり、その場は解散となったのであった。

・・・・・・・・・・・・・

その後、選出されたメンバーであるナツ、グレイ、エルフマン、ジュビアに加え、ルーシィ、ハッピー、ウェンディ、シャルル、リサーナ、ショウブが1つのテーブルに集まっていた

グレイ「今年はえらくハードルが高ェな」

ナツ「オレは燃えてきた！！！　絶対Ｓ級になってやる！！！」
シャルル「意外ね、アンタたちみんな初挑戦なんて」
ウェンディ「ショウブさんが試験管なんてびっくりしました」
ショウブ「おいおい、敬語はよせって」
エルフマン「ぬぉぉ、漢エルフマン！！　Ｓ級への道が遠ざかる」
リサーナ「みんな頑張ってね！」
ルーシィ「そういえば、みんなもうパートナーって決まってるの？」
ナツ「オレはもちろんハッピーだ」
ハッピー「あい」
エルフマン「ハッピーはズリィだろ！！　もし試験内容がレースだったら、空飛べるなんて勝負にならねえ」
リサーナ「別にいいんじゃない？」
ハッピー「オイラは絶対ナツをＳ級魔導士にするんだ！！！！」
ナツ「こればかりは仲間といえど、絶対ぜってーゆずれねえ！！！！」
ナツ「こうしちゃいられねえー！！　修行だー！！！」
ハッピー「あいさー！！」

そう言って意気揚々とギルドを出て行くナツとハッピーを見送ったあと、リサーナが口を開く。

リサーナ「私がいない２年の間に、ナツがＳ級の試験に参加するようになってるなんてね。ナツはね、一人前の魔導士になれば、イグニールに会えると思ってるの。」
ルーシィ「そっか……がんばれ、ナツ」
ジュビア「あの、ジュビアはこの試験を辞退したい」
ウェンディ「ええ！？なんで！？」
ジュビア「だって……様の…パートナーに…なり…たい……」

グレイ「何だって？」
ジュビア「だから…あの……ジュビアは……「グレイとパートナーがいいだとよ」
グレイ「ア？」
ジュビア「ショ…ショウブさん！！？」
グレイ「悪ィがオレのパートナーは決まってる」
「久しぶりだね、みんな」
ルーシィ「ロキ！！？」

そこに現れたのはルーシィの所有する星霊の1人である、獅子宮のレオこと、ロキであった

グレイ「昨年からの約束でな」
ロキ「ルーシィ、悪いけど試験期間中は契約を解除させてもらうよ。心配はいらない、僕は自分の魔力で門
をくぐってきた。だから君の魔法は使えなくなったりしないよ」
ルーシィ「なんて勝手な星霊なの？」
リサーナ「私がジュビアと組むわ」
エルフマン「本気かリサーナ！」
リサーナ「私エドラスじゃジュビアと仲良かったのよ。それにこっちのジュビア……なんか可愛いんだもん」
ジュビア「リサーナさん…」
リサーナ「決定ね！！」
エルフマン「ちょっと待てよリサーナ！！　それじゃオレパートナーがいねーじゃねーか！！！」
リサーナ「そう？　さっきから熱い視線を送ってる人がいるわよ」
エルフマン「へ？」

そう言ってリサーナが指差す先には、カウンター席からエルフマンの方をジッと見ているエバーグリーンの姿があった

エルフマン「エバーグリーン……」
リサーナ「フリードがパートナーにビックスローを選んだ事でむくれてるみたいね」
エルフマン「熱い……ってより、石にされそうな視線じゃねーか！！！」

何はともあれ、こうしてエルフマンのもう1人のパートナーはエバーグリーンに決定したのであった。

・・・

いつの間にかレビィの背後に立っていたガジルが、そう言い放った

ガジル「試験中は気に入らねぇ奴ぶっとばしてもいいんだろ」

しかしレビィは暗い顔で俯く

レビィ「私…体も小っちゃいし、何にも取り柄ないから、すぐ負けちゃうかもしれないよ」

ガジル「やる前からそんな弱気でどーすんだよ」

レビィ「あっ、やだ……おろして～」

そう言ってガジルはレビィの襟首を軽々と持ち上げる。

レビィ「オレがお前をでかくしてやるよ」

レビィ「……」

そして力強くそう言い放つガジルの言葉を聞いて、レビィは淡く頬を朱に染めたのであった。その様子を見ていたジェットとドロイはしおしおと落胆し、リリーは笑みを浮かべていたのであった。

・・・・・・・・・・

ギルドから自宅への帰路を歩いているウェンディとショウブ、そしてシャルルの姿があった。

ウェンディ「どうしたのシャルル、朝からずっとおとなしいね」

ショウブ「具合でも悪いか？」
シャルル「ちょっとね。何かイヤな予感がするのよ…この試験とかいうやつ……ショウブは無理としても、絶対参加しちゃダメだからね」
ウェンディ「それに私なんかパートナーにする人いないし、大丈夫だよ」
「それはどうかな？　天空の巫女」
「「！！」」

ショウブ達の前に、選出されたメンバーの1人であるメストが現れる。
ウェンディ「あ…えーと……」
ショウブ「……」
「オレはメスト。ミストガンの弟子だった」

結果的にウェンディはメストと組むことになった。ショウブは気をつけろと注意をして自宅？への道へ進んで行った

・・・・・・・・・・・・・

雪の降るマグノリアを歩いているルーシィ。あのあとギルドから自宅に帰ろうとしているのだ
ルーシィ「ん？あれって……」
ルーシィは何かに気がつき、横道にあった狭い路地をよく見る。そこには……泥酔して酒瓶や酒樽と共に地面

に転がっているカナの姿があった。

ルーシィ「どこで泥酔してんのよォォ！！！！！」

そんなルーシィのツッコミが、その場に響き渡ったのであった。
その後、さすがにそのままにはしておけず、ルーシィはカナを自宅へと運んだのであった

カナ「いやぁ助かったよ。誰にも気づかれなかったら死んでたね」
ルーシィ「もう！　最近ずっと様子おかしいよカナ」
カナ「どうせミラから聞いてるんだろ？　Ｓ級試験ノイローゼみたいなモンだよ」
ルーシィ「そう言えば、試験の時期になると決まってギルドをやめるとかどうとか言ってたわね」
カナ「実はさ、もう５回目なんだ。４回も落選した期待ハズレな魔導士なのさ、私は」
ルーシィ「何だぁ、そんな事かぁ。別に何回落ちてもいいじゃない」
カナ「４回も落ちてるのは私だけだよ。だから今回で最後にする。これでＳ級になれなかったら、妖精の尻尾フェアリーテイルを抜ける」
ルーシィ「ちょっと……そんなにＳ級にこだわらなくても」
カナ「私はＳ級にならなきゃいけないんだっ！！！！……Ｓ級にならなきゃ、あの人に会う資格はない。私は…」

そう言うと、カナはどうしてもＳ級にならなければならない理由を話した。涙を流しながら語るカナの話に、
言葉を失いつつも……カナの話に耳を傾けた

カナ「…という訳だ。今回S級になれなかったら、私はギルドを抜ける。もう決めたんだ」

その言葉を最後に、話を締めくくるカナ。すると、ルーシィとは決心したような顔付きで頷き合うと、カナに向かって叫ぶ。

ルーシィ「あたしがカナのパートナーになる!!!!絶対にギルドをやめさせたりはしない!!!!必ずカナをS級魔導士にするから!!!!!」

カナ「ルーシィ…」

そして……ついにS級魔導士昇格試験の日がやってきたのであった。

事件発生

・・・

ナツ「キモチ悪ィ～」
ロキ「ナツ！！　こっちには来ないでくれるかな」
ナツ「ウェンディがトロイアをかけてくれねーんだよ」
ロキ「仕方ないよ。ウェンディはメストのパートナーだし」
ショウブ「はぁ…ほいよ」
ナツ「お、お、お、おおっ！！すげぇ！！よってねえ！！」

ショウブが魔法をかけるとナツの酔いが収まった
ショウブ「さすがに乗り物酔いで開始前からS級試験リタイアなんて笑いすらとれねえからな」
エバーグリーン「やだやだ、これからみんな敵になるってのに馴れ合っちゃってさ」
エルフマン「アチィ！」
ルーシィ「あ」
ロキ「見えてきたね」
グレイ「おお」
ナツ「すげえ形してんなぁ！！」

彼らの視線の先には、中心にまるで小島のような大樹を生やした巨大な島があった。それそこ、妖精の尻尾の聖地天狼島である。

マカロフ「あの島にはかつて、妖精がいたと言われていた。そして妖精の尻尾初代マスター
メイビス・ヴァーミリオンの眠る地」

そう言って現れたのは、短パンにアロハシャツというラフな格好をしたマカロフであった。

グレイ「何だよその服！！」
マカロフ「だってアツいんだもん」
ショウブ「服きてない奴が言っても説得力がないぞ」

マカロフの服装にツッコミをいれるグレイだが、全裸の彼に言われても説得力は皆無であった

マカロフ「これより、一次試験の内容を発表する」
ウェンディ「一次試験？」
メスト「だいたい毎年、何段階かに分かれるんだ」
マカロフ「島の岸に煙が立っておるじゃろう、まずはそこへ向かってもらう。そこには８の通路があり、
１つの通路には１組しか入る事はできん。そして、通路の先はこうなっておる」

そう説明した後で、マカロフは魔法で自身の横に映像を映し出す。
するとそこには……１つの闘という文字と、２つの静という文字…
そしてエルザたち現役Ｓ級魔導士の顔ともに描かれた４つの激闘という文字が、通路の先に記されていた。

マカロフ「ここを突破できたチームのみが、一次試験合格者じゃ。
闘のルートはこの８組のうち２組が
ぶつかり、勝った１組のみが通れる。激闘は現役Ｓ級魔導士を倒さねば進めぬ、最難関ルート。一次試験の

目的は武力、そして運」
『（運て――）』
ルーシィ「運ならいけるかも！」
カナ「静を当てる確率は２／８しかないのよ」
エバーグリーン「理論的には、最大８組が合格できる訳だね」
エルフマン「ム…無理だ！！　ギルダーツやエルザのいる道は突破できねえ！！」
レビィ「最悪の場合は３組しか突破できないのか……」
ガジル「面白ェ！」

一次試験の内容を聞いて、口々にそう言うメンバーたち。

マカロフ「さあ始めい！！！！！　試験開始じゃ！！！！！」

マカロフの口から開始の合図が出された。しかし船はまだ島には着いておらず、海の真ん中で止まっていた。
グレイ「は？」
ロキ「ここ……海の上じゃないか」
ナツ「そう言う事か、　ハッピー！！　先に通路を選ぶんだ――！！！！」
ハッピー「あいさー！」

いち早くマカロフの意図を察したナツはハッピーと共に空へと舞い上がり空へと飛び立つ。しかし……

ハッピー「んが！」
ナツ「な！？」

そんな2人の行く手を、見えない壁が阻んだ。

カナ「術式！？」

そう言うカナの視線の先には、術式を張った張本人であるフリードとパートナーであるビックスローと共に、島へと向かっている姿があった。

フリード「安心しろ、5分後に解けるようになっている」
ビックスロー「ずーっと閉じ込めとけばいいじゃねーか」
フリード「それじゃ試験にならん」
グレイ「オイ！！　じーさん！！　あんなのアリかよ！！」
マカロフ「まあレースじゃないし」
ショウブ「あいつの武器はその術式なんだから対策ぐらいしてこいよ…」
グレイ「フリードさんを先行かせたら島中術式だらけにされちまうだろ！！」
ナツ「どわーーっ！　くそーーーー！！！！」
ロキ「そうだ！！　レビィなら」
レビィ「うん、書き換えられるよ」

そう言ってフリードの術式を書き換え始めるレビィ。それを見た他の面々は、これで出られるかと思いきや…

…

レビィ「でも私とガジルだけ！！！！！」

『何ィーー!!?』
ガジル「ギヒヒ」

レビィは自分とパートナーだけを通行可能にし、２人揃って海へと飛び込んだ

レビィ「じゃあねー、みんなお先ー」
ナツ「コノヤロ〜〜〜」

意気揚々と島へと泳いでいくレビィたちを、ナツは恨みがましく睨んでいた

エバーグリーン「フフ、私もフリードと付き合いが長いからね」
エルフマン「エバーグリーン」
エバーグリーン「これくらいの術式の書き換えくらいできるわ」

そう言うと、エバーグリーンも術式の書き換えを行った。当然、自分達だけが通れるように

エバーグリーン「さあ行くわよエルフマン!!!!」
エルフマン「おおおおおお漢ォォォ!」

エルフマンたちも海へ飛び込み、泳いで島へと向かって行った

ナツ「くそォ!!」
ルーシィ「あと何分足止め？」
ジュビア「まだあと４分です」

カナ「じゃあレビィの奴、たった1分で術式を……」
ショウブ「…ここで完全に出遅れたあなた達にアドバイス。ここから速く移動するためには手段を選ばないのがでしょう。飛ぶもよし、海を凍らせようと、水中生物に変身しようがなんでもありです。とにかく早く行きましょう。では俺はこれで」

ショウブはそう言ってどこかへ行った。残ったメンバーは成す術なく、術式が解けるまで待つしかなった。

・・・

グレイ「アイスメイク…床（フロア）！！！！」
ルーシィ「わっ！！　海面を氷に…」

グレイチームは、グレイが凍らせた海面をスケートのように滑りながら島へと向かっていく

ジュビア「リサーナさん、ついてきてます！？」
リサーナ「大丈夫よ！！」

ジュビアチームはジュビアは水となって海と一体化し、リサーナは得意魔法である動物の魂で魚に変身して
最速のスピードで泳いで行った

ルーシィ「ちょっとカナ！！　あたしたち一番遅れてるわよ！」
カナ「まだメストとウェンディが残ってるわ！」

メストチームは、いつの間にか船上から姿を消していた

ルーシィ「急がないと通路を選べなくなっちゃうわ！」
カナ「とにかく急ごう！」

そしてカナチームは、急いで島へと泳いでいったのであった

・・・・・・・・・・・・・

ナツたちが一次試験を行っている頃、天狼島周辺海域の上空では…
…

シャルル「あれが天狼島よ」
リリー「すげー形の島だな」

シャルル、リリーのエクシードの２人の姿があった

リリー「シャルルはウェンディが心配なんだな」

けっこう和む光景だった

・・・・・・・・・・・・・・・

ウェンディ「ここで大丈夫なんでしょうか…」
メスト「大丈夫だ」
ウェンディ「あれ、誰かいますよ？」
ショウブ「やっ、二人とも」
ウェンディ「ショウブさん！？」
メスト「なぜ君が…」
ショウブ「なぜって、俺が試験管だからだろ」
メスト「知らなかった～！！」
ショウブ「……もう演技はやめたらどうだ？メスト・グライダー。いや、新生評議院諜報部、ドランバルト」

ショウブがそういうとメストは黙ってしまった

ウェンディ「え……嘘…ですよね……」
ドランバルト「……いつ気がついた」
ショウブ「あんたのことは最初から怪しいと思ってたんだ。去年は

ギリギリ無理だった。ミストガンの弟子だったう情報だけだ。ミストガンの情報からしてそいつが弟子を作るとは思えない。それにメンバーと喋ることもなかった。本当に妖精の尻尾のメンバーならもっと親しげに話しているはずだ。そこであんたのことを調べてみたんだ。するとどうだ？新生評議院諜報部ドランバルトと顔が全く同じじゃないか。使う魔法は瞬間移動。あんたがドランバルトだとすると、船の上でいなくなったのも納得できる」

ウェンディ「…う…そ……今までのも…全部…全部演技だったんですか…？」

するとドランバルトがウェンディを引き寄せる

ドランバルト「俺はこのまま評議員本部にいかせてもらう」

ショウブ「まてっ！！っっ！！！！」

ドランバルト「じゃあな！！」

何か強力な気配を感じてひるんだ隙に、ドランバルトは逃げて行ってしまった

ショウブ「…とにかく、さっきの気配だけ確認したらさっさと追いかけるか」

そう言ってショウブはすぐに気配察知した。そこでショウブは驚くべく事実を知った

ショウブ「海上に評議員の小隊…上空に巨大なドラゴンの気配３つに闇ギルドと思われる者２００人ほど。その中で９人ほど明らかに魔力の高い者がいる。ギルドマークは……悪魔の心臓！？今すぐ知らせないと全滅するぞ！？」
ショウブはおお急ぎでマカロフと合格者たちの元へ向かって行った

・・・・・・・・・・
マカロフ「…というわけで二次試験開始！！」
ショウブ「待ったあああああああああ！！！！」

ショウブが全力で走ったためなんとか二次試験開始前に追いつくことができた。そこにはカナとルーシィ、ナツとハッピー、グレイとロキ、レビィとガジル、エバーグリーンとエルフマン、そしてマカロフがいた。
どうでもいいが後ろで竜巻が起きている

ルーシィ「早すぎて竜巻起きてんですど！！？？」
ショウブ「そんなん今は問題じゃねえ！！！！メストが、ドランバルトがウェンディを連れてきやがった！！！！」
『何いいいいいぃぃぃぃぃ！！！！！』
ナツ「おいそれどういううことだ！！」
ショウブ「いいか。メストは新生評議員諜報部ドランバルトだ。詳しくは知らんがウェンディを人質にとって行った」

ルーシィ「ええっ！！そっれちょっとやばくない！！？？」
ショウブ「しかも海上に評議員の小隊、上空にドラゴン３体と悪魔の心臓の船がある！！！！評議員は待機、悪魔の心臓とドラゴンは接近中！！！！悪魔の心臓は後１時間もしないうちにここにくる！！！！」
グレイ「じゃあどうしろってんだ！！！！」
ショウブ「俺にも責任があるからウェンディは俺が救出に行く。お前らはマカロフと一緒に悪魔の心臓を頼む。ドラゴンがくるのは早くても明日だからまだ時間がある。じゃあな！！！！」

言うだけ言ってショウブは助けに言ってしまった

レビィ「ほ、本当にやるのぉ…」
ガジル「ギヒッ！！」
グレイ「六魔将軍の次は悪魔の心臓か。そのうち冥府の門とも戦うことになりそうだな」
ロキ「怖いこと言わないでよ。とにかく今は目の前のことに集中しよう」
ナツ「あいつ等…俺らを敵に回したこと、ぜってえ後悔させてやる」
ハッピー「あいさー！！」
ルーシィ「あーもう！！やけくそよ！！」
カナ「……」
マカロフ「全員戦闘準備じゃあああああああああああああ！！！！！」

その時マカロフによって敵襲の意味をなす、赤い魔力弾が放たれた。
この瞬間、妖精の尻尾ＶＳ評議員ＶＳ悪魔の心臓による戦い始まっ

たのであった

妖精は悪魔にすら勝る

・・・・・・・・・・・・

評議員トップ1「よくやったぞドランバルト！！潰すまでにはいかなかったが、これで妖精の尻尾も大人しくなるはずだ！！戻っていいぞ」

ドランバルト「はっ！！（命令どうりにやったが本当にいいのだろうか。あのギルドは本当に…）」

ドランバルトは資料室に行き妖精の尻尾について調べた

ドランバルト「ああ。なんてバカなことをしていたのだろう。皆のためとはいえこんなことをしてしまうなんて……謝りに、行こうか」

・・・・・・・・・・・・

ウェンディ「……う…ん…ここは…？」

ウェンディは小さなクリスタル（牢）の中で目を覚ました

ウェンディ「そうだ、私メストさんに連れていかれたんだ…」

誰かが目の前に下りてきた

ドランバルト「ウェンディ…」

ウェンディ「メストさん…」
ドランバルト「俺はドランバルトだ。それよりさきほどはすまなかった」
ウェンディ「い、いえ、そんな」
ドランバルト「…少し話を聞いてくれないだろうか」
ウェンディ「え？はい、いいですけど…」
ドランバルト「ありがとう。俺は貧しい村の生まれでね、ほかの村まで仕事に行ってたんだ。でも金や食料は何もくれなくてね、盗みなんかをしなきゃ生きてけなかった。俺はこの瞬間移動の魔法を使ってなんとか生きながらえていたんだ。そんなある日、評議員が来たんだ。俺の魔法の才能を買いに来たんだ。それで俺は必ず凄くなって村を大きくすると決めた。それからは評議員として生きていたんだ。だが、貧しい村の生まれだ。ラハール以外は俺をバカにした。それが悔しくて悔しくてがんばった。その結果、諜報部になったんだ。それでも俺は出世しようとがんばってたんだ。それで妖精の尻尾の噂を聞いた。問題ばかり起こしているらしいから、何とかすれば出世できると思ったんだ。そんな時、上から命令がきた。妖精の尻尾を潰せ、ってな」
ウェンディ「……」
ドランバルト「俺はそれを聞いた時舞い上がったよ。これで村のみんなを助けられるってな。俺はギルド全員の記憶を操り、メスト・グライダーとして侵入した。そして天浪島に行くため、君を利用した。でも君はあのシャルルというネコの反対を押し切ってまで、俺をS級にしようとしていた。俺は止めようかと思ったが、村

の皆のためにやり続けた。それでも一週間の間、君達を見ていると俺の心が大きく揺らいだ。本当にこれでいいのか、と。だが俺はそのまま演技を続けた。そしてそのまま時が進んで行った。それから君を連れ去ってから調べていたが、君たちは仲間のために戦っていると知った。そのためには評議員を、世界を敵に回しても戦うと知った。俺と同じだった。だから今までやってきたのがバカバカしく感じたんだ。だからこうして謝りにきた。本当にすまなかった。ウェンディ」

ドランバルトはウェンディに頭を下げて謝罪をする

ウェンディ「頭を上げてください。ドランバルトさん」

ドランバルト「ずっと騙して、誘拐してきたあげく、牢にまで入れられてるのに、許してくれるのか？」

ウェンディ「たしかに許せません。でも、ドランバルトさんは村の皆さんのためにやったんですよね？私もギルドの皆さんが生きていけない状態だったら、どんなことをしてでもギルドの皆さんと会おうとすると思いますから」

そんな時警報がなった。部屋が赤く染まった。

ドランバルト「侵入者か！！おい、どうなっている！！！！」

評議員の一人が入ってきた

評議員1「そ、それが新しく妖精の尻尾の者が謎の化け物を連れて一人でここに迫ってきています！！！！」
「「ショウブか／さん！！！！！」」

・・・

その時ドアが蹴破られた

ショウブ「ふ～、ここが牢か。かなり広いな」
ウェンディ「ショウブさん！！」
ショウブ「ウェンディ！！」

ショウブはドランバルトを睨みつける

ショウブ「お前、覚悟はできてんだろうな」
ウェンディ「待ってくださいショウブさん！！ドランバルトさんは生まれ故郷の貧しい村のためにやってたんです！！それにもう心から反省してます！！」
ショウブ「ウェンディ、何言ってんだ！！こいつはお前をさらって牢に閉じ込めたんだぞ！！」
ウェンディ「お願いします！！」

ショウブは数秒程目を瞑り、ゆっくりと目を開けた
ショウブ「……わかった。ここは退こう。だが、またウェンディを連れ去るなら、たとえ宇宙の果てまで逃げようと、どんな手を使ってでも連れ帰る」
ウェンディ「／／／／／／／」
ドランバルト「ああ、上にはそう伝えておく」
ショウブ「ああ、後天浪島付近にいる小隊は引っこめといてくれ」
ドランバルト「もう離れているよ」
ショウブ「そうか。ならウェンディ、急いで戻るぞ。悪魔の心臓が来てるんだ」
ウェンディ「悪魔の心臓が！！」

ショウブ「飛ばすからな、風の守りでも張って、しっかりつかまってろ」
ウェンディ「は、はい！！（ショウブさんの背中、大きくて、温かい。かっこよくて、強くて…って何を考えて！！）／／／」

・・・

るまで俺もいくさ」
ナツ「とりあえずあのやろうと戦ってりゃいいんだろ！！」
ショウブ「そうなるな。そんじゃ行くぞ！！」
『おお～！！』

・・・・・・・・・・・・
潜入してから数分

「おい！！この船の防音設備はどうなってるんだ！！全然雷の音、聞こえるぞ！！」

リリーは外から聞こえる雷の音にビビっており、耳を塞いでそう言う。

シャルる「はいはい」
ハッピー「大丈夫だよ、落ちたりしないから」
シャルル「置いてくわよ、リリー」
ショウブ「（リリーって雷にがてだったのか）」

ハッピーたちはそんなリリーを気にすることなくずいずい先に進んでいく。

「ぬうっ・・・・」

リリーはハッピーたちの後を耳を塞いだまま追いかけた。

さらに数分

ショウブ「一体どこに心臓があるんだよ」
シャルル「これだけ大きいとまるで何か大きいものをまもってるきがするわ」
ハッピー「だよね～？それにすごく厳重に警備されてるはずだよ～」

いまだに悪魔の心臓のマスターハデスの心臓を探し回っていた
シャルル「でも何でさっきから見つからないの？」
ショウブ「勘だ」
シャルル「勘！！」
ハッピー「でもその超人的な勘で誰にも見つからずに探せてるね」

緊張感もなくしばらく四人は進んでいると、

ショウブ「あ！！」

ショウブが何かを発見し、立ち止まる。

ハッピー「わっ！」
シャルル「いたっ！」
リリー「どわっ！」

すると急にショウブが止まったため、後ろをついてきていたハッピーがショウブの足に、シャルル、リリーが
それぞれ前の者のお尻にぶつかる

シャルル「ちょっと！！急に止まるんじゃないわよ！！」

シャルルがショウブに対して怒鳴る

ハッピー「リリー」
リリー「なんだ？」

ハッピーが突然リリーに話しかける。ハッピーは首をひねり、リリーの方を見るが、その顔は怒っているように見える

ハッピー「当たったね？」
リリー「は？」
ハッピー「シャルルがオイラのお尻に当たったってことは、リリーはシャルルの」
リリー「仕方ないだろ！！突然止まったお前が悪い！！」

ハッピーの理不尽な物言いにリリー文句を言った。ちなみにショウブ、ハッピー、シャルル、リリーの順に歩いてきた

ショウブ「シャルルのお尻にポフッて当たったことを怒ってるのか？」
ハッピー「そうだよ、リリー！！どうなんだね！！」
リリー「お前！！今ここでそこについて文句を言うのか！？そんなこと言ってる場合か！！」
ハッピー「オイラにとったら大事なことなんだ！！帰ったら決闘だ！！」

なぜかハッピーはすごい燃えている。

シャルル「やめなさーい！！」

シャルルに怒られ、ハッピーは鎮まる。シャルルはショウブに話しかける

シャルル「それよりもショウブ、さっき何に驚いてたの？」
ショウブ「あ、そうそう」

ショウブの視線は、鉄枠の中にある一室に注がれていた。

ショウブ「これ、なんだ？」
シャルル「こ…これ、なに……」
ハッピー「生きてる…？」
シャルル「これって…」
ショウブ「たぶんこれはハデスの…」
リリー「グリモアハート、悪魔の心臓…まさかな…」
ショウブ「たぶんそのまさかだ」

急に部屋の外から声が聞こえてくる

戦闘員達『中で声がしたぞ！！』
戦闘員達『バカな！！どうやってこの部屋に！？』
ショウブ「！！」
シャルル「見つかったわよ！！」

外からした声は悪魔の心臓グリモアハートの戦闘員たちのものであ

った。

リリー「敵は俺とが食い止める。お前たちは、これを停止させるんだ！！」

リリーとは戦闘員を抑えるために扉に向かって走り出す

ハッピー「停止！？」

シャルル「やりましょ！！」

ハッピーたちは困惑しながらもこれの停止を行うことにした。リリーは扉から外へと出て、敵の前に立つ

戦闘員1「なんだこのちっこいネコは？」

戦闘員2「踏み潰しちまえ」

すると、扉からショウブが出てきて戦闘員1，2は敵に向かってを投げ飛ばされる

『『『うわあああ！！』』』

リリー「ショウブ」

ショウブ「俺は囮だっていっただろうに」

戦闘員3「このやろう！！やりやがったな！！」

悪魔の心臓の戦闘員たちはショウブとリリーを睨み付ける。しかし、

リリーが戦闘モードに体を変化させと全員が驚愕した

リリー「うおおおおおっ！！」
戦闘員１「なんだこいつは！？」
戦闘員２「怯むな！！」
戦闘員４「つぇあーーー！！」

一人がリリーに斬りかかろうとしたが、リリーはそれを片手で止める。

リリー「借りるぞ」
戦闘員４「わっ！！俺の剣！！」

その受け止めた剣をリリーは敵から奪い取り、凪ぎ払うように斬りかかる。するとその剣が大きくなった
リリー「大きさが変化する剣か。我が剣バスターマアムのようだな」
ショウブ「…やっぱ俺ハッピーたちの手伝いしてくるわ」
ハッピー「停止って言ってもどうやって！？」
シャルル「色々いじってみるしかなさそうね」
ショウブ「まて、下手にいじると大変なことになる。そこはそうしろ」

ハッピーたちはリリーが敵を食い止めている間にハデスの心臓を停止させるべく奮闘していた。ショウブはその手助けへ向かった。ちなみにさっきリリーの手に入れた刀は使用者の強さに合わせた大きさへと変化する刀

だった

戦闘員５「死守しろーーー！！」

戦闘員１「この部屋だけは死守するんだーー！！」

敵戦闘員たちはリリーに次々と立ち向かってくる

リリー「気に入った、こいつを俺の武器にする！ギヒッ」

リリーは笑みを浮かべ、迫り来る敵を凪ぎ払っていく

戦闘員４「ああ…ムジカの剣…高かったんだぞ…あれ」

リリーに剣を奪われてしまった敵はさめざめと泣いていた

ショウブ「魔力が戻ってきたぞ！！」

ハッピー「天浪樹が戻ったんだ！！」

ショウブ「ナツの魔力が変わった？ともかく魔力が戻ったんだ、ナツたちの所に……行かなくてもよさそうだな」

リリー「な、なんだ！！雷が聞こえるぞ！！」

シャルル「どうなってるのよ～！！」

ナツ「滅竜奥義、改！！！！」

ナツの声が聞こえた

ナツ「紅蓮爆雷刃！！！！」

ハデス「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

誰かを倒したようだ。それは潜入前に聞いたハデスの声だった

ショウブ「やったんだな、ナツ」

・・・・・・・・・・

ナツは意識を失っているハデスを見つめ、魔力の消耗が激しかったのか、倒れそうになる

ナツ「じっちゃん…奴等に見せてやったぞ…全身全霊をかけた…ギルドの力を…」

そしてナツは両手を高々と上げて勝鬨をあげる。

ナツ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！これが俺たちのギルドだぁぁぁぁぁ！！」

悪魔との戦いは終結した。妖精の尻尾は勝利を喜びをみんなで分かち合っていた

グレイ「終わったな」

エルザ「ああ」

ウェンディ「私たち、勝ったんですね！！」

ルーシィ「はい、マフラー」

ナツ「ありがとな」

ルーシィはマフラーをナツに手渡す。ナツはそれを笑顔で受け取る。
そんな何気ない光景を見て笑っていた。
すると、突然ハッピーたちの悲鳴が聞こえてくる。

ハッピー「ふぇぇぇん！！」
ショウブ「おーい！！」
ルーシィ「あれって…」

ナツはハッピーたちの方へと視線を移す。すると、そこには悪魔の心臓の戦闘員たちに追いかけられていた
ショウブたちがいた

グレイ「まずいぞ…」
エルザ「くそ…さすがにもう魔力がゼロだ」
ウェンディ「はわあ…」

ナツたちはあまりの人数に動揺していた。さっきまでのハデスとの戦いで魔力が完全になくなってしまったよ
うだ

リリー「すまん…俺も魔力が…」
ショウブ「俺も…この数はちょっとな…」
リリーもどうやら魔力切れを起こしたらしく、いつものミニマムサイズになっていた。その背中には何やら剣
を持っている。ショウブの方もあまりの数に逃げてきたようだ

ハッピー「みんな怒ってるよー！！」

シャルル「そりゃそうでしょうけど…」

ナツたちは何をしたんだ？と思っていると、ショウブたちと敵の間に数人の人影が割って入る

マカロフ「そこまでじゃ！！」

そう言ったのはマカロフだった。他にも、簡易ベースに残っていたはずのギルドの仲間もいた

ナツ「じっちゃん！！」

ルーシィ「みんな！！」

ウェンディ「ミラさんたちもいますよ！！」

ショウブ「無事だったのか」

エルザ「そうか、天狼樹が元に戻って、島の加護が」

急な増援に戦闘員たちはびびってしまう

戦闘員５０「うおっ！！増えた！！」

戦闘員３０「あ、あれはマカロフか！？」

戦闘員１００「てかあそこを見ろ！！」

びびってしまった悪魔の心臓の戦闘員たち。その一人が倒れているハデスを指さす

戦闘員１「マスターハデスが！！」

戦闘員７００「倒れてる！！」

それを見て悪魔の心臓の戦闘員たちにはさらに動揺した

マカロフ「今すぐこの島から出ていけ！！」

戦闘員４０「わ、わかりました！！」

戦闘員２００「信号弾だ！！」

戦闘員１０００「お邪魔しました——！！」

マカロフにそう言われた戦闘員たちは、これ以上戦闘しても勝てないと判断し、大急ぎで走り去っていく

『『『やった——！！』』』

ショウブたちは今度こそ勝利したのだと確信し、みんなで抱き合ったりハイタッチしたりと大盛り上がりを見せた

グレイ「ありゃ？」

ナツ「どうした？グレイ」

グレイはナツとハイタッチしたあと、辺りを見回し誰かを探している

グレイ「いやぁ…ジュビアは？」

ナツ「キャンプには戻ってなかったな」

グレイはジュビアのことが気になっているようだった。しかし自分

の気持ちに気づいてないようだ

マカロフ「……」
ラクサス「……」
マカロフ「よくぞ…戻ってきた…」

マカロフはラクサスに労いの言葉を…

マカロフ「なんて言うと思ったかバカタレめ！！！破門中の身でありながら、天狼島に足を踏み入れるとは！！！」

かけることはなく怒鳴り散らしていた

ラクサス「うっせぇじじいだな」
レビィ「マスター落ち着いて」
リリー「顔でかっ！！」

その様子を遠くから見ていたフリードさんたち雷神衆は…

「「「ら…ラクサス…」」」

ビックスロー「帰ってきたのか！！」
エバーグリーン「ラクサスー！！」
フリード「お～～～～いおいおい！！」

ラクサスに飛びついた。フリードは号泣してる

エルフマン「相変わらず厳しいなぁ、マスターは。これぞ漢」
ミラー「そうね。破（・）門（・）中（・）、か」

ナツ「さーて試験の続きだ！！」
ルーシィ「今からやるの！？」

今度はナツがS級魔導士昇格試験の続きをやりたいといい始めた

ナツ「二次試験は邪魔されたからな、ノーカウントだ！！この際分かりやすくバトルでやろうぜ、バトルでよ！！」

ナツはシャドーボクシングをしながらそう言う

ガジル「てめぇの頭どうなってんだ！？」
ナツ「そんなボロボロで俺に勝てると思ってんのかぁ？」
レビィ「やめなよガジル！！」

レビィさんが二人を止めようとするが、この二人には通じない

ナツ「ああ、余裕だね！！今の俺は雷炎りゅ…ぐぱーっ！！」

言い争っているとナツがなぜか落ちた

ルーシィ「ナツ！？」
グレイ「どんな気絶の仕方だよ！！」

エルザ「炎以外の魔法を食べた時の副作用だな」

エルザが解説する。つまり誰かの雷を食べたから気絶したのである

ウェンディ「とりあえず、キャンプまで戻りませんか？」

シャルル「少しは休まないと体がもたないわ」

グレイ「それもそうだな」

ショウブ「俺は式神全員よんで疲れたから寝てからいくわ」

皆ウェンディの言葉を聞いて簡易ベースへと戻っていく。ショウブだけ船の上で寝てしまう

ウェンディ「ちょ、ここで寝たら風邪ひいちゃいますよ！！！！」

シャルル「私が持ってくわ。ウェンディを助けてもらった恩もあるし……ん～～！！お、重い～～～～！！」

シャルルは恩返し的な意味でショウブを連れて行こうとするが持ち上がらず、結局ウェンディと連れていくことになった

ルーシィ「え！？ちょっと…あたしがナツ運ぶの？」

ハッピー「大丈夫！！オイラが応援してあげます！！」

ルーシィ「手伝うとか言えないのかしら…」

精霊「そういうことでしたら、私メェにお任せくださいルーシィ様」

ルーシィ「カプリコーン！！あ…ありがとう」

カプリコーンはルーシィさん片腕でお姫様抱っこする

ショウブ「うわ…気のせいかナツがおざなりに…」

この戦いのヒーローのはずのナツはカプリコーンにまるで荷物のような姿勢で持たれていた

カプリコーン「こちらのネコ様はルーシィ様のご学友で？」

ハッピー「あい！！そちらのルーシィ様の先輩に当たります！！」

カプリコーンとハッピーはなぜか仲良く話しをしながら簡易ベースへと戻っていく

・・・・・・・・・・

ショウブ「う、ん…ウェンディか？」

ウェンディ「はい」

ショウブは目を開けた時ウェンディの顔が目の前にあったことに少し驚いているようだ

ショウブ「ウェンディ」

ウェンディ「はい」

ショウブ「なんで俺は膝枕されてるんだ？」

ウェンディ「いや…ですか…」

ショウブ「別に、そういうわけじゃないが…」

ショウブがウェンディに膝枕されてることを聞くとウェンディがう

るんだ瞳でいう。ショウブもこれには勝て
なかったようだった

ハッピー「ウェンディ、オイラも治癒魔法かけてー」

そう言ってやって来たのはハッピーだった

ウェンディ「うん！！いいよ」

ウェンディはそういってハッピーに治癒魔法をかけていく。しばらくすると…

ハッピー「お～！！もう痛くない！！」
ウェンディ「次…レビィさんのケガの手当てをします」

ウェンディはレビィさんを呼ぶ

レビィ「私は大丈夫！ウェンディも少し休んだら？」
ウェンディ「いいえ…天狼樹が元通りになってから、調子がいいんです」

ウェンディはキラキラしながらそう言う。そして相変わらず騒がしいのは変わらない。ナツをリサーナがツインテールにして遊んだり、雷神衆とラクサスとエルフマンも妙に楽しそうにしてるたり、ルーシィもカプリコーンにダイエットしなさいとか言われてカナが苦笑いし、いつのまにか帰ってきたギルダーツとマカロフが座

りながら何か話したり

ナツ「ギルダーツ！！俺と勝負ーーー」

《ガンッ》

ナツ「ぷぎゃっ！！」

ギルダーツ「休ませろっての」

グレイ「瞬殺かよ…」

目が覚めたナツはギルダーツに勝負をしかけ、瞬殺される

グレイ「ウェンディ…こっちも頼む…」

エルフマン「漢だ」

ガジル「お前は、ちゃんと治してもらっとけよ、リリー」

リリー「俺のことより、お前のダメージの方が深刻だな」

ウェンディが治癒をしていると、いつの間にか長い行列になっていた。

ショウブ「俺も回復魔法使えるし手伝おうか」

ウェンディ「大丈夫です！！こういう時こそお役に立てるし！！」

シャルル「あんまり無理しちゃダメよ」

ウェンディが皆の治癒をしていると、不意に声をかけられる

「ウェンディ、変わろうか」

ウェンディ「？」

ウェンディが視線を向けると、なぜかナース服を着たエルザさんがいた

ウェンディ「え…エルザさんその格好…ナース？」
ショウブ「てかその服どこから持ってきたんだよ」
エルザ「さっき換装したのだ」
ショウブ「なんで鎧と一緒にナース服があるんだよ」
シャルル「てかあんたに治癒の力ないでしょ！！」

エルザに対しショウブたちは次々突っ込みを入れていく

エルザ「勝負に能力の差は関係ないぞ、試されるのは心だ」
ウェンディ「ふぇ！？勝負ですか？」
ショウブ「勝負して肝心の治療ができなかった意味ないだろうに」
シャルル「ちょっと！！ウェンディが怯えるじゃない！！」
レビィ「エルザってやっぱり妖精の尻尾だね…」

エルザに勝負を吹っ掛けられ、ウェンディは涙目になり、シャルルは怒鳴る。ショウブとレビィは呆れていた
。　エルザさんは近くの木箱に座ると足を組み、ナツたちに言う。

エルザ「さぁ素直に言ってみろ、痛いところはどこだ？まずは熱を測ってやろうか？それとも、注射がいいか
？」
グレイ「ったく。何が始まったかと思えば…」
ガジル「いかれてるぜ」
ナツ「うんうん」

グレイたちはエルザを見てそう言う。だが行動と言葉が一致していない

ギルダーツ「ちゃっかり割り込むなっての！！」
ラクサス「ちゃんと並べよてめぇら！！」
シャルル「オス共！！」

ウェンディの列に並んでいた皆は、全てエルザの方へと並んた。おまけに、さっきまで並んでなかったギルダーツやラクサスまで向こうに並んだ

シャルル「ほ…ほら！少し休めるからよかったじゃない！！」
ウェンディ「やっぱり、お胸の差でしょうか…」
レビィ「！！」

ウェンディはさっきまでの笑顔から一転しょんぼりと肩を落した。慰めようとしていたレビィさもウェンディに胸のことを言われ何も言えなくなった

エルザ「包帯を巻くというのは、なかなか難しいものだな」
「「だぁーーー！！殺す気かぁ！！」」

エルザに並んだグレイとガジルは包帯でがんじがらめにされていた

ジュビア「グレイ様、お仕置きするより、お仕置きされる方が好きだなんて…ジュビアショック」

レビィ「ガァジィルゥ！！」

ジュビアはグレイを見てハンカチを噛みしめ、レビィはなぜかガジルを見て怒っていた

リリー「気のせいか、悪魔の心臓との戦いが、遠い過去のようだな」
ショウブ「さっきまであんなに大変だったのにな」
シャルル「まぁ、いつものことだから」
ハッピー「それが妖精の尻尾です！！」

俺たちのそんな光景を見て呆れながらもそう締めくくった。マカロフとミラは何やら話していたけど、ショウブたちはそんなのお構いなしに大騒ぎしていた

ドラゴン襲来

・・・・・・・・・・

マカロフ「皆の者、心して聞け」

さっきまで騒いでいたショウブたちは今は、マカロフの話を聞くために静かになっている

マカロフ「今から重大発表をする。天狼島からギルドに戻ったその日より…」

ショウブたちはマカロフの話に耳を傾る

マカロフ「女子のみ制服を設定する！！ナース服かスク水限定じゃ！！ヤッホー！！」

ルーシィ「何の話かしら！？」

マカロフの発表にルーシィが突っ込む

エルザ「なるほど。それは楽しみだな」

ルーシィ「乗らない！！そこ怒るとこ！！」

ミラ「マスター…ここは真面目に…」

マカロフ「すみましぇ～ん！！ちょっと乗りで！！」

そんなマカロフをミラが睨む。ミラさんに睨まれたマカロフはじぶしぶ話を戻した

マカロフ「おほん、重大発表なのじゃが…今回のS級魔導士昇格試験は中止とする！！」
「「「「なんだとぉぉぉぉぉぉぉっ！？」」」」

ナツ、グレイ、ガジル、エルフマンは大声で叫んだ

マカロフ「だ・か・ら！！今回はS級魔導士昇格試験は中止とする！！」

マカロフは再度ナツたちにそう言うが、納得いかないようだ

ナツ「納得いかねぇぞじーさん！！」
グレイ「なんで中止なんだよぉ！！」
ガジル「俺をS級にしやがれ！！」
グレイ「候補者はおめぇじゃなくて！！レビィの方だけどな！！」
マカロフ「仕方なかろう、色々あったんじゃから」
ミラ「候補者の中に評議院が紛れ込んでたり、悪魔の心臓に邪魔されたり」
レビィ「今回は仕方ないかなぁ」
ガジル「おめぇ！！それでいいのかよちくしょーー！！」
マカロフ「お前がそんなに暑くなることもなかろう」

マカロフとミラの説明でレビィは納得したのだが、なぜかガジルはいまだにS級を諦められないようだ

グレイ「だぁーー！！S級になりたかったーー！！」

グレイは頭を抱えながら叫び、

ジュビア「大丈夫！！グレイ様なら次こそきっと！！」

ジュビアはそんなグレイを励まし、

エルフマン「はぁ…漢は引き際も肝心か」

エルフマンはため息を吐きながらも諦めたようだ

ナツ「俺は諦めねぇぞ！！絶対S級になるんだ！！グレイもエルフマンもレビィも諦めるんだな？だったら俺がS級になる！！S級になるんだ——！！」

候補者が次々に納得する中、ナツだけはいまだに駄々をこねて暴れている

ハッピー「落ち着こうよナツ」

マカロフ「ふぅ—…しょうがないのぅ。特別じゃ！！今から最終試験を始めよう！！ワシに勝てたらナツをS級にしてやろう」

マカロフは手をヒラヒラとし、かかってこいといった感じに動かす

ナツ「本当かじっちゃん！？おっしゃ——！！燃えてきた——！！」

ナツはやる気満々だが、結果が目に見えてる

ナツ「いくぞぉ！！」

ナツはマカロフに飛びかかったが

《ゴンッ》

巨大化した右手に殴られ、一瞬で潰されました

ナツ「…参りました…」

あまりの速さにほとんどが驚くしかなかった

ショウブ「ウェンディ」

ウェンディ「はい、なんですかショウブさん」

ショウブ「少し、相談ごとがあるんだが、二人で話せないか」

ウェンディ「いいですよ。シャルル、ちょっとショウブさんと言ってくるね」

シャルル「ショウブ、ウェンディに変なことしたら容赦しないわよ」

ショウブ「わかってるって」

・・・・・・・・・・

ショウブ「ふぅ、ここら辺ならいいか」

ショウブは簡易キャンプ場から少し離れた場所に来た

ウェンディ「あの、それで、相談っていうのは…」
ショウブ「相談っていうよりかは質問って感じかな。で、それは俺の気持ちことだ」
ウェンディ「ショウブさんの？」
ショウブ「ああ。俺が初めてウェンディと会った時から思ってたんだが、ウェンディがほかの男と接してるとこう、心が痛むんだよ。なんかチクチクする感じがするんだ。初めて、ナツと勝負して、ウェンディがナツを治療しにいった時。ドランバルトの時もだ。あの時は怪しさとか、助けることとかに集中してあまり感じなかったが、やはりチクチクする感じがある」
ウェンディ「え、だ、大丈夫なんですか！？」
ショウブ「それで長年の知識から一つの結論に至った。俺はウェンディが好きなんじゃないか、と」
ウェンディ「ふぇ！？／／／」

ウェンディの顔が赤く染まった

ショウブ「最初は否定してたが、やっぱりクエストの最中でも、何度も何度もくると否定できくなってきた。
それでウェンディ、お前の気持ちを聞きたい。正直に自分の思ってること言ってくれればいい」
ウェンディ「私は……」

ウェンディが言葉を飲んだ。そして口を開いた

ウェンディ「私は、よくわかりません。でもドランバルトさんにパ

ートナーに選ばれた時、ショウブさんと組
みたかったとか、評議会から天浪島に向かう時不思議と安心して、
かっこいいとか考えちゃってたり……私も
ショウブさんに…恋してるのかも…しれません／／／／」
ショウブ「……そうか。いきなりずうずうしいとは思うが、俺と付
き合ってくれないか／／／／」

ショウブが初めて顔を赤くし、ウェンディに告白する

ウェンディ「…はい…／／／／」

・・・・・・・・・・・・・
ショウブ「今戻った～」
シャルル「早かったわね」
ショウブ「まあな」
ミラ「あらあら、どうしたの手なんてつないじゃって」
ウェンディ「えっと…／／／／」
ショウブ「今ミラが思ってる通りだ」
ミラ「それはよかったわね」
ショウブ「ああ」
ウェンディ「はい」

そんな時、遠くから何かの音が聞こえてくる

《ォォォォォンッ》

《ァァァァァァアッ》
《ォォォォォォオッ》

ルーシィ「何？」
ナツ「何の音だ？」

ショウブたちは突然の音に辺りを見渡すが、特にこれといった変化は見られない

ガジル「どうせ、ルーシィの腹の虫かなんかだろ？」
リサーナ「え！？こっちのルーシィって、こんなすごい音するの！？」
レビィ「ちょっとガジル？デリカシーにかけた発言しないでよね」
ガジル「ギヒッ」

ボケるガジルとそれを真に受けて驚くリサーナ。ガジルの発言にレビィは少し怒っているようだ。

ミラ「あらあら、それじゃあお食事多めに用意しておかないとね」
ガジル「おい！！冗談だっつうの！！」

ミラは笑顔でそんなボケを言い、ガジルも驚きながら突っ込んだ

グレイ「まぁそれはそうとしても、妙な地鳴りだったな」

グレイは真面目な顔をしてそう言うが、ビッグスローとフリードはその下を指さして青ざめている

「ハァ…ハァ…」
グレイ「なんだ？今度は荒い息づかいみたいのが聞こえるぜ！」
その荒い息づかいもなぜかグレイの下からする。気になったショウブは下を覗く。するといきなりショウブは吹いた
ショウブ「ブフッ！！」
グレイ「どうした？ショウブ」
フリード「おいお前…何に座ってるんだ？」
フリードは意を決してグレイに質問する
グレイ「何って、椅子に決まって…うおっ！！」
グレイは自分の座っているものを見て驚愕した。それは椅子なんかではなく、お尻を突きだしているジュビアだった
グレイ「いつの間に！！」
ジュビア「ゼレフを逃がしたジュビアは、グレイ様の椅子がお似合いですわ！！」
グレイ「だから、そんな趣味はねぇっってんだろ！！」
幸せそうな顔で言うジュビアから逃げるように立ち上がるグレイ
ミラ「はい、ショウブ、ウェンディ、お待たせ」

ウェンディ「ありがとうございます」

ミラがショウブとウェンディに飲み物を持ってきたので、ウェンディはそれにお礼を言う

ショウブ「ケガしてるのにすまんな」
ミラ「いいのよ。私が好きでやってるんだから」

申し訳なさそうに言うショウブに笑顔で答えるミラ

エルフマン「さすが姉ちゃん!!漢だぜ!!」
シャルル「違うでしょ!!」

ミラを褒めるエルフマンだが、いつも通り漢を強調するからシャルルに突っ込まれる。するとエルフマンの頭
を誰かが木の棒で叩いた。

エルフマン「何すんだこのやろう・・・」
エバーグリーン「漢漢って…アンタといると無性にイライラしてくんのよ!!」
エルフマン「なんだそりゃ!!」

エルフマンは次々に頭を連打されている

ウェンディ「ふふ」

その二人の様子を見て微笑んでいるウェンディ。ショウブはミラか

らもらった飲み物を飲もうとしたが、ある異変が起きていた

「……」

ウェンディ「どうしたの？シリル……！！」

ウェンディも自分の飲み物を見てその異変に気づいた。なぜか飲み物が揺れていたのだった。その飲み物の揺れが止まったかと思ったら、

「オオオオオオオオオオオンッ！！」

「オオオオオオオオオオオオオッ！！」

「アアアアアアアアアアアアアッ！！」

遠くから凄まじい咆哮が聞こえてきた。

レビィ「きゃっ！！」

ミラ「なんなの！？」

ラクサス「ぐうっ！！」

ショウブ「あああああああああああああっ！！！！思い出した！！！！！」

シャルル「五月蠅いわね！！」

ショウブ「そんなこと言ってる場合じゃない！！全員逃げろ！！」

シャルル「はぁ？どういうことよ？」

ルーシィ「みんな！！大丈夫！！」

ナツ「すごい声だ！！」

ギルダーツ「お前ら…」

釣りに行っていたナツとギルダーツとハッピー、それに、ルーシィとカナがこちらに駆けてくる。こちらに向かってきていると、ギルダーツは突然左腕に手を当てる

カナ「ちょ！！大丈夫！？」
ギルダーツ「古傷が、疼いてきやがった…間違いねぇ、奴だ。奴が来るぞ」
ショウブ「ぼさっとしてないで全員さっさと逃げろ！！！！逃げないと死ぬぞ！！！！」
リリー「おい！！上を見ろ！！何か来るぞ！！」

空を指さすリリー。全員、上空を見上げる。雲に隠れて姿までは確認できないが、そこには何か大き影が３つあった。

ナツ「なんだアレ！？」
グレイ「でけぇぞ！！」
ショウブ「手遅れか！！」

それを見上げていると、雲からその姿を次第に現してくる。雲から見えたその姿は、黒く巨大なドラゴンと赤く巨大なドラゴンと緑い巨大なだった。

仲間のために俺たちは戦う

・・・・・・・・・・・・・・・

ルーシィ「ドラゴン！？」

シャルル「何なの？一体…」

そのドラゴンがこちらに近づいてくると、その旋回によって強烈な風が吹き寄せる

ナツ「マジかよ…」

ガジル「あれを間違うはずがない…」

ウェンディ「本物のドラゴン…」

マカロフ「黙示録にある黒き竜、赤き竜、緑の竜アクノロギアとリオレウスとリオレイアだと言うのか！？」

マカロフはそのドラゴンを見上げて驚いている。

ギルダーツ「ああ、奴だ」

ルーシィ「いたんだ、本物のドラゴン」

ギルダーツとルーシィがそう言う。すると、ナツが前に出て

ナツ「お前！！イグニールが今どこにいるか知ってるか！？あとグランディーネとメタリカーナも！！」

ギルダーツ「よせ！！ナツ！！」

自分たちの親のことについて聞こうとするナツをギルダーツは急いで止める

ギルダーツ「奴を挑発するな！！お前には話したはずだ！！なぜこの俺がこの腕…いや、体になったのか！！」

ナツはギルダーツの言葉を聞き、何も言えなくなる

フリード「降りてくるぞ！！」

フリードの言う通り、黒いと赤と緑のドラゴンはこちらに向かって降下してくる

ショウブ「あれは、ナツたちの大好きな竜じゃない。もっと邪悪な竜だ」

ドラゴンが着地すると、ものすごい衝撃と振動が俺たちを襲う

ギルダーツ「ああ。その通りだ、こいつは人類の敵だ！！」

ナツ「じゃあ、こいつと戦うのか！？」

ギルダーツ「いや違う。そうじゃねぇんだよ、ナツ」

しかし、ギルダーツはナツの言葉を否定する

ギルダーツ「勝つか負けるかじゃねぇ。こいつからどうやって逃げるか…いや、俺たちの内…誰が生き残れるかって話なんだよ！」

ナツ「こんな奴に、俺たちの誰かが殺られるっていうのかよ！！」

《オオオオオオオオオオンッ》

「「まずい！！みんな――！！逃げろ――！！！」」

アクノロギアが叫んだのと同時に、ギルダーツとショウブが逃げろと叫ぶ

《オオオオオオオオオオンッ》

全員はあまりにも突然すぎてその場に立ちすくんでいると、今度は赤い竜が叫び、その衝撃で吹き飛ばされる

ナツ「お…おい…なんだこりゃ…森が消し飛んでやがんじゃねぇか…」

全員は上体を起こし前を見ると、さっきまで青々と生い茂っていた木々が全て消し飛び、そこは荒れ地へと変わり果てていた

グレイ「ウソだろ・・・」

ミラ「なんて破壊力なの？」

ルーシィ「なんなのよこれ…吠えただけでこんな…なんなのよこい

つ！！」

全員、アクノロギアの叫び声の破壊力に驚くことしかできないギルダーツはアクノロギアを見るがすでにその姿は上空へと飛び上がっており、たショウブたちのことをまるで見下しているかのようだった

ギルダーツ「ちっ！高みの見物かよ！！」

全員その場に立ち上がり、体勢を整える

ギルダーツ「さしづめ、今のは挨拶代わりってところか？」

ショウブ「気に入らないな…」

ギルダーツ「みんな！！まだ生きてるな！！ビビってる暇はねぇぞ！！すぐにこの島から離れるんだ！！」

《オオオオオオオオオオオッ》

さらに今度は緑い竜が大声を出す

ギルダーツ「来るぞ——！！船まで急げ——！！」

エルザ「走れ——！！みんなで帰るんだ！！妖精の尻尾へ！！」

全員ギルダーツとエルザの指示に従い全速力で船へと走る

シャルル「ウェンディ！！あんたたち竜と話せるんじゃなかった！？なんとかならないの！？」

シャルルは走りながらウェンディにそう言う。

ウェンディ「私たちが話せるんじゃないよ！！竜はみんな高い知性を持って――――！！」

ウェンディが説明していると、全員の頭上をアクノロギアたちは通りすぎ、先頭を走っているフリードとビッグスローを襲う

「「ぐわっ！！」」

エルザ「なんてことだ！！」

ラクサス「ビッグスロー！！フリード！！」

グレイ「先回りだと！？」

全員すぐにその場に立ち止まるしか選択肢がなくなってしまう

ウェンディ「どうして…どうしてこんなことを…」

ウェンディはアクノロギアたちに問いかけるが、アクノロギアたちはそれに答えようともしない

ウェンディ「答えて！！」

ショウブ「無駄だ、ウェンディ」

ショウブはウェンディを制止する

ショウブ「あいつらは俺たちを虫けらとしか思ってないんだ。だから俺たちの話に耳を傾けることをしない」

アクノロギアたちは全員に次々と攻撃を仕掛けてくる

ショウブ「無限結界！！」

ショウブはいくつもの結界を作り出し防ぐ

ギルダーツ「お前…」

ショウブ「…結界に傷一つつかない、か。あの力でこの程度の破壊力なわけがない。やはりどれも本気を出してないな。気に入らない」

レビィ「やだ…やだよ、こんなの…」

レビィは涙混じりでそう言う

ナツ「うおおおおっ！！」

ナツはアクノロギアたちに立ち向かおうと走り出すが

《ガンッ》

ナツ「うおあっ！！」

すぐに殴り飛ばされる

ナツ「お前！！」

ナツはアクノロギアたちに対して怒鳴るが、その前にマカロフがアロハシャツを脱ぎ捨て立ちふさがる

ナツ「じっちゃん！！」
マカロフ「船まで走れーー！！」

マカロフは巨大化し、アクノロギアたちに立ち向かう

グレイ「無茶だ…敵うわけねぇ！！」
エルザ「マスターー！！やめてください！！あなたに何かあったら、ギルドは…」
マカロフ「走れーー！！」

グレイとエルザはアクノロギアたちを必死で食い止めるマカロフを止めようとする。だがマスターは絶対にアクノロギアたちを離そうとはしない

エルフマン「かくなる上は俺たちも…」
グレイ「妖精の尻尾をなめんじゃねぇぞ！！」
エバーグリーン「当たって砕けてやるわ！！」
ビックスロー「おおよ！！」
ウェンディ「みんなで力を合わせれば！！」

全員アクノロギアたちに立ち向かおうと構える

マカロフ「最後くらいマスターの言うことが聞けんのか！！クソガキがぁ――！！」

マカロフのその言葉で、俺たちの中に動揺が生まれる。だが

ナツ「俺は滅竜魔導士だ！！そいつが敵って言うなら、俺が――――」

ナツがマカロフに加勢しようとしたが、それをラクサスが止めるように引っ張り始める

ラクサス「走るぞ！！ナツ！！」

ナツ「ラクサス！！お前……！！」

ナツはラクサスに文句を言おうとしたが、それをやめる。ラクサスは涙をこぼしていたからだ

エルザ「マスター…どうかご無事で」

エルザもそのあとに続いて走り出す。ほかの全員もマカロフに背を向け走り出す。みんな、涙を流し

走り続けた。マカロフは自分の仲間を、子を守るため、歯を食い縛り、痛みに耐え、アクノロギアたちを食い止める

マカロフ「何の目的か知らんがなぁ…これ以上先には進ませんぞ！！
この後ろにはワシのガキどもが
いるんじゃあ！！」

マカロフは叫ぶ。しかしアクノロギアたちはそんなことなどお構い
なしにマカロフを押す

マカロフ「ぐわあああああああ！！」

マカロフは次第に押され始め、ついにアクノロギアたちによって地
面へと倒されるアクノロギアたち
は倒れたマカロフの左胸を押し潰そうと力を入れる

マカロフ「ごわあああああああああ！！」

痛みと目の前のアクノロギアたちに絶叫するマカロフ

マカロフ「ああああああ…はっはっはっはっ」
「「「？」」」

絶叫していたマカロフが突然笑い始め、アクノロギアたちはそれに
困惑する

マカロフ「（初めて親らしいことが…できたわい）」

マカロフは自分の子供たちを守れたことに満足し、笑みを浮かべて
いたのだった

マカロフ「（もう思い残すことはない…）」

マカロフは目を閉じ、自らの死を受け入れようとしていた。しかし、その脇を一人の男が駆け抜ける

。アクノロギアたちはその男を潰そうと尻尾を振るうが、男はそれを避けてアクノロギアの体を登り始める

ナツ「じっちゃんを、返せ！！」

マカロフ「ナツ！！」

その男は、先程マカロフが命を賭けて救おうとした内の一人、ナツだった。アクノロギアはまとわりつくナツを振り払おうと体を大きく動かす。それにより、マカロフは近くの岩壁へとぶつけられ、元の大きさに戻ってしまう

マカロフ「ごほっ…ごほっ…」

思わず咳き込むマカロフの前に、鎧を身に纏った女騎士が立つ

マカロフ「エルザ…お前まで…」

ラクサス「俺は反対したんだぜ」

エルザと反対側に、ラクサスの姿がある

ラクサス「けど…老いぼれ残して逃げられるような奴等かよ、あんたのギルドは」

ラクサスはマカロフに向かってそう言った

エルザ「かかれ――!!」

『『『オオオッ!!』』』

エルザの掛け声と共に妖精の尻尾の総攻撃を開始する

マカロフ「バカたれが…」

マカロフは震えながらそう言ったが、その顔は嬉しさを感じているようにも見えた

『うおおおおっ!!』

『やあああああっ!!』

『食らえぇぇぇぇ!!』

アクノロギア達は体を振り回し攻撃した

ルーシィ「きゃっ!!」

ショウブ「ウェンディはサポートに回れ!!。アクノロギアは桁違いの強さだ!!俺が相手する!!

誰もくんなよ!!ナツたちはリオレウスとリオレイアの相手をしろ!!」

そういうと勝負はアクノロギアのあごを蹴り、はるか高くまで飛ばした

《オオオオオオオオオオオッ》
ショウブ「おらぁ！！ドリアン百個だ！！」

ショウブがドリアンというのをアクノロギアの口に投げ込む。すると急にアクノロギアが悶絶しだした

ショウブ「俺が知ってる中でもドリアンは一番の臭さを誇る物だ！！しかも皮には棘がある！！さすがのお前もつらいだろうよ！！ほら俺はこっちだ、ついてこい！！」

ショウブはさらに上へ飛んでいく。アクノロギアもショウブを追って上へ飛んでいく。

ナツ「アクノロギアぶったおしてこいよ、ショウブ！！」
ショウブ「ああ！！」

ＶＳリオレウス・リオレイア

・・・・・・・・・・・・・

ラハール「あれは、ゼレフ書に載る３匹のドラゴン…ひ、ひけー！！撤退、撤退しろ！！急いで撤退しろ！！」

今ごろ撤退しだした評議員たちだった

・・・・・・・・・・・・・

ショウブがアクノロギアと戦っている時ナツたちは・・・

グレイ「お前、ぶったおしてこいとは言ったが、このリオレウスとリオレイアって奴はどうするんだよ」

ナツ「知らん！！」

グレイ「そんなんでいいのかよ！！」

エルザ「くるぞっ！！」

エルザがそう言った後、リオレウスは火球を吐きだし、リオレイアは突進による攻撃をした

レビィ「あのリオレウスっていうは空をよく飛んで、主な攻撃手段は炎みたい！！リオレイアっていう

のは空は飛べるみたいだけど主な攻撃は素早い移動による地上での物理攻撃みたい！！」
エルザ「なに！？よし、ナツ、聞いていたな！！」
ナツ「ようはリオレウスの野郎の炎を食えってことだろ。まかせろ、炎は俺の飯だ！！うおおお

リサーナ「きゃあああ！！」
ジュビア「リサーナさん！！」
リサーナ「大丈夫……！！がはっ！！」
ジュビア「リサーナさん！！……これは…毒！？ウェンディさん！！
リサーナさんが毒に！！」
ウェンディ「今治療します！！」
レビィ「みんな、リオレイアの尻尾には毒があるからきおつけて！！」
ミラ「わかったわ！！」

ミラがサタンソウルでリオレイアに攻撃するが硬い鱗にはばまれ、
殆ど攻撃が通用しなかった。そこにラ
クサスが割って入る

ラクサス「レイジングボルト！！」

体に雷を集め、空中からリオレイアのに放出する。滅竜魔法はかな
りのダメージを与えたようでよろめく
がそれで終わってしまった

ラクサス「くっ、これが伝説の竜の力か…」
レビィ「ラクサス後ろ！！」

リオレイアはお返しと言わんばかりに、ラクサスに空中から突進を
仕掛ける

ラクサス「ぐわあああああ！！」
フリード「ラクサス！！」

ビッグスロー「行け、ベイビーたち！！」

ラクサスは宙をまったがフリードとビックスローの人形たちによってなんとか頭を打つのは免れた

ウェンディ「ラクサスさん！！」

ウェンディはラクサスの治療を始める。そんな時騒がしい声を聞き、レビィがリオレウスの方に目を向けると…

ナツ「じゃますんな変態氷と屑鉄野郎！！」
ガジル「てめえらこそじゃますんなボケ炎と変態氷！！」
グレイ「お前らこそじゃますんなバカ炎とバカ鉄！！」
カナ「真面目に戦いなよっ！！！！」

ナツ、ガジル、グレイ、が喧嘩をしており、リオレウスの方も呆れている感じがした

レビィ「ちょっとガジル！！真面目に戦いなさい！！」

レビィが叫んだ時リオレウスがレビィめがけて火球を繰り出す。グレイが冷やし、ナツが吸い込むも、間に合いそうにない……だが、それがあたることはなかった

ガジル「へっ、間に合ったみてぇだな」
レビィ「ガジル！！」

ガジル「無事か？」
レビィ「無事かって、それよりガジルの方こそ大丈夫なの！？直撃したんでしょ！！」
ガジル「へっ、この程度じゃくたばらねえよ。それに、てめえを守れただけで十分さ」
レビィ「え／／／」
ガジル「おい、リオレウス、てめえのその体に刻みこんでやるよ」
ガジルが攻撃準備をする。その時ラクサスの方も準備をはじめる
「「滅竜奥義」」
ガジル「業魔・鉄神剣！！！！！」
ラクサス「鳴御雷！！！！」
ラクサスとガジルのこんしんの一撃により、二頭の竜は大きく後退し海にまででた。すると急に黒
いなにかが二頭にぶつかり、海に沈む。
ナツ「今のは…まさか！！」
ナツが上を見上げると、ショウブがいた
ナツ「ショウブ！！」
ウェンディ「勝ったんだ！！じゃあ今の黒いのはアクノロギア！！？？」

ＶＳアクノロギア

・・・・・・・・・・・・・

ナツたちがリオ夫婦と戦っているころ、ショウブは上空５００００ｍにてアクノロギアと戦っていた…

ショウブ「ふぅ、ここなら被害は出ないな。さあ、かかってこい！！」

ショウブがかかってこい宣言をすると、アクノロギアはおたけびをあげた。その威力でカマイタチが起こるがショウブはすべて避けた

ショウブ「この程度で当たると思うか？俺が本当のカマイタチを見せてやる。バギムーチョ！！」

風の刃がアクノロギアを襲う。その威力は空にある星にクレーターができるほどだ。アクノロギアも傷を負うが大きなダメージは通らなかった。アクノロギアはショウブを強く睨む。その顔には悔しさもあるが、同時に楽しそうな表情を見せる

ショウブ「その顔、いいねぇ。悔しくてたまらないだろう。俺を殺したいだろう。そして楽しくて、嬉しいんだろう。そりゃそうだよな、お前はゼレフ書に載る最強と言われた魔導士"破壊の滅竜魔導士"だもんな。さあこいよ、アクノロギアッ！！！！」

アクノロギアはショウブに向かって飛んでいく。ショウブはアクノロギアをいなしつつ、スペルカードを使う

ショウブ「断迷剣［迷津慈航斬］」

能力で作った刀に霊力を流し、思い切りアクノロギアを斬る。アクノロギアの右腕が落ちた

ショウブ「紫電［積乱雲の稲電］　」

アクノロギアの周りが黄と灰色の弾幕でおおわれる。ショウブは３秒ごとにアクノロギアに向かって雷を纏ってつっこんでいく。アクノロギアはでかい図体で避けられなかったが、ショウブが接近した瞬間に噛みつき、腕を食い破る

ショウブ「やるなぁ。だがまだまだいくぞ！！。異変［異次元空間大量発生］

スキマが開きそこからレーザーやらナイフやら札やらがアクノロギアに向かって飛んでいく。アクノロギアは避けきれず被弾する。すると

アクノロギア「…お前、強いな」

ショウブ「喋れたんだな」

アクノロギア「ああ」
ショウブ「謝っておくが、お前の記憶を読ませてもらった」
アクノロギア「それで俺が人間だと知っていたのか」
ショウブ「ああ、勝手に読んで悪いな。と、喋れるならちょうどいい。お前、俺の仲間にならないか」
アクノロギア「そうなると、あいつらも仲間になるのか」
ショウブ「あたりまえだろ」
アクノロギア「俺は弱いやつに興味はない」
ショウブ「だがあいつ等は元吸血鬼の俺も、受け入れてくれたぜ。最近入ったばかりだが仲良くしてくれたし、お前もあいつ等といれば、そんなことどうでもようくなるぞ。お前は根はいいやつなんだし、あいつらもうけいれてくれるさ。特にマカロフやナツわな」
アクノロギア「お前がそういうならそうなんだろうな……ただし、俺に勝ったらだ」
ショウブ「わかった。今の俺の全力で、お前を倒しに行く！！禁忌［フォーブアカインド］」

ショウブが四人に分身する（これからはこの技を使う際、本体を1、それ以外を2、3、4で表記します）

ショウブ1「魔妖術［ダークマスタースパーク］！！」
ショウブ2「幽閉［ジャック・ザ・ルビドレ］！！」
ショウブ3「核爆破［おかしすぎる爆弾］！！」
ショウブ4「［パーフェクトアクション］！！」

ショウブ1は妖力と魔力を合わせ、マスタースパーク（魔力の極太レーザー光線）を放ち、ショウブ2は時を止め、アクノロギアの周りにナイフを設置する。解除された瞬間大量のナイフがアクノロギアを襲う。ショウブ3は核爆弾（威力底上げ）を使う。大きく上げられたアクノロギアにショウブ4は霊力、妖力、魔力を込め、アクノロギアに攻撃を仕掛ける。最後に思いっきりアクノロギアを殴り飛ばすと

ショウブは一人に戻り…

ショウブ「お前の魔法で終わらせてやる。これで止めだ！！！！破竜の…咆哮おおおお

ウェンディ「勝ったんだ！！じゃあ今の黒いのはアクノロギア！！？？」

謎の赤き竜

・・・・・・・・・・・・・

ショウブ「よぉ、お前ら。生きてるか？」

ナツ「けっこう余裕だったぜ」

グレイ「バカ言え。俺がいなかったら負けてただろ」

ナツ「んだと変態氷」

グレイ「そのままの意味だよクソ炎」

ウェンディ「それよりショウブはどうだったの」

ショウブ「油断して片腕食われた。もう治ってるがな」

ウェンディ「そ、そう。よかった…」

するとアクノロギアが海から上がってきた

エルザ「まだ生きていたのか！！？？」

ルーシィ「ちょっとやばくないかしら……」

するとショウブが前にでる

ショウブ「さ、約束どおり仲間になってもらおうか、アクノロギア」

ナツ「は？……」

ハッピー「今なんていったのショウブ…」

ショウブ

だから約束どおり仲間になってもらおうかって…」

『『『えええええええええええええええ！！！！！』』』

アクノロギア「…キャラが濃いな」
ショウブ「それはよく思う」
ウェンディ「え？え？ほ、ほんとにそう言ったの？」
ショウブ「ああ、そうだが」
マカロフ「とんでもないことをするのぉ…」

すると大きな影ができる

ショウブ「…またドラゴンかよ。今度はなん…だ…！！」

ショウブが上をみると七つの首と七つの王寛をかぶる、赤いドラゴンがいた。ショウブやマカロフなどの者はわかる。アクノロギアよりも強いと。ほかの者もとても強いことがわかる…

ショウブ「…黙示録に載る…最強最悪の竜……！！！！」

…ドラゴンは大きく飛びあがると空気をためる

ナツ「咆哮だーーっ！！」
シャルル「島ごと消すつもりじゃないでしょうね！！」
ギルダーツ「マジ…」
ウェンディ「そんな…」
マカロフ「防御魔法を使える者は全力展開！！」
フリード「術式を書く時間はない！！」
レビィ「文字の魔法には、他にも防御魔法がたくさんあるよ！！」
エルフマン「さすがレビィだぜ！！」

ミラ「みんな！！フリードたちに魔力を集めて！！」
グレイ「手を繋ごう！！」
ウェンディ「わかりました！！」

妖精の尻尾の全員で手を握る

ナツ「俺たちはこんなところで終われねぇ！！」
ルーシィ「うん！！絶対諦めない！！」
ナツ「みんなの力を一つにするんだ！！ギルドの絆を見せてやろうじゃねーか！！」
ショウブ「アクノロギア！！お前も手伝え！！死ぬぞ！！」
アクノロギア「わかった！！」

皆は一つの大きな和になる。

マカロフ「みんなで帰ろう…」
『『『妖精の尻尾へ！！』』』

謎の七首ドラゴンの咆哮が、天狼島へと放たれた。そして…

天狼島は巨大な爆発音と共に消滅した

×７８４年１２月１６日天狼島…消滅を確認

原因は謎の赤い七首の竜の咆哮によるもの

その後、半年にわたり近海の調査を行ったが、生存者は確認できず

…

そして、7年の月日が流れた

X791年

・・・・・・・・・・・

マックス「ナツ!!起きろこのやろう!!」

ウォーレン「ショウブ!!目を覚ませ!!」

ジェット「よくわからんがお前もだ!!」

マックスたちはナツたちの上に乗っていた土をどけ、二人をひたすらに揺すっている。すると…

ナツ「だぁーーー!!うっせぇ!!」

ナツは勢いよく起き上がり文句を言いながらなんとか上体を起こす

「「「ナツー!!」」」

目を覚ましたナツにウォーレン、マックス、ジェットは抱きつき、ドロイが最後にのし掛かる

ナツ「どうなってんだ一体…」

ナツとは3人を見て驚いている

ナツ「つーか少し老けてねぇか?」

ジェット「お前は変わらねぇな」

ナツ「てかドロイ太りすぎ!!」

ナツは自分の前にいる仲間の変貌に頭がついていかない。

ナツ「ちょっと待てよ！！俺たち　さっき…変な竜の攻撃を食らって…ほかのみんなわ！！」

「こちらです」

『！？』

ナツたちは声のした方を見た。そこには金髪の少女がいた

ナツ「誰？」

ナツは問いかける。

メイビス「私の名はメイビス。　妖精の尻尾初代マスター、メイビス・ヴァーミリオン」

『ええっ！？』

衝撃の事実にナツたちは声を上げる。メイビスはすぐに歩き出し、みんなの元へナツたちを案内する。そこには謎の竜の咆哮を受けたはずのみんなが生存していた。マックスやウォーレンたちはそれを見て歓喜し、喜びあっていた

メイビス「あの時、私は皆の絆と信じ合う心、その全てを魔力へと変換させました。皆の想いが、妖精三大魔法の一つ、妖精の球を発動させたのです。この魔法は、あらゆる悪からギルドを守る、絶対

防御魔法。しかし、皆を凍結封印させたまま、解除するのに7年の歳月がかかってしまいました」
マカロフ「なんと、初代が我らを守ってくれたのか」

マカロフは初代に感謝し、嬉し泣きする

メイビス「いいえ、私は幽体。皆の力を魔法に変換させるので精一杯でした。揺るぎない信念と強い絆は奇跡さえも味方につける。良いギルドになりましたね、三代目」

メイビスは純粋無垢な笑顔でそう言ったのであった

ウェンディ「大変です!!ショウブがいません!!」

ウェンディが叫ぶと皆周りを見渡す。そこにはウェンディの言う通りショウブの姿が見えなかった。皆ショウブの名を呼ぶ。すると急に近くの草が揺れる。そこから…

ショウブ「お前ら、ここにいたか」
『『『ショウブ―!!』』』
アクノロギア「やめろ」
ショウブ「お前もやめんかアクノロギア」
「「「え～!!!!」」」

ショウブの言葉で3人は驚く。ほかの者も身構える

ショウブ「大丈夫だ。こいつはもう悪さはしねぇよ」

グレイ「だけどよ…」
ショウブ「こいつは、自分を倒してくれる奴を探してたんだ。それももう終わった。だから大丈夫だ」
ウェンディ「…わかった」
シャルル「ウェンディ!!」
ウェンディ「なんとなくだけど、私はアクノロギアが嘘を言ってるように見えない。今のアクノロギアの目はグランディーネと同じだから」
ナツ「俺もそんな気がする」
ガジル「俺もだ」

実際に竜と暮らしていた滅竜魔導士の3人がいうため、ほかの者も一様納得した

エルザ「それにしてもなぜショウブは見つからなかったのだ？」
ショウブ「紫が結界を張ってたから場所が分からなくなったんだ」
『『『紫？』』』
ショウブ「実はさっき……」

・・・・・・・・・・・・
ショウブ「ん～～…助かったのか？…アクノロギアも人型になっているか」

ショウブが起き上がると朝日が昇っていた。すると急にショウブの動きが止まった

ショウブ「…いるんだろ紫」

そうショウブが問いかけると空中に目玉が大量にあるスキマができた。その中から、ドレスを着た金髪の女性がでてきた

紫「…7年たっても鈍ってないみたいね」
ショウブ「その気味の悪いスキマどうにかならないのか？…それにしても、もう7年も経ってたのか…」
紫「…幻想郷に戻らないのかしら？」
ショウブ「…俺は今の暮らしが気に入っている。あいつらの行く末を見てみたい。ウェンディのこともあるしな。修行とかでたまには戻るつもりだが、よほどのことがなければ、もうこっちで一生を過ごすつもりだ」
紫「…そう。シルフたちはあなたと一緒にいたいみたいだけど？」
ショウブ「連れてく」

ショウブがそう答えるとスキマの中から4体の精霊がでてきた

シルフ「久しぶり！！」
ノーム「…久しぶり」
ウンディーネ「久しぶりね」
サラマンダー「久しぶりだな！！」
ショウブ「久しぶりだな、お前ら」
シルフ「うん、それでねショウブ…」
ショウブ「お前らのおもちゃになる気はないからな」

ノーム「…冷たい」
ショウブ「お前らにつかまると、失神するまで漏らす（意味深）ことになるからな」
アクノロギア「誰だ？」

いつの間にか起きていたアクノロギアは紫たちに聞く

ショウブ「俺の仲間だ。左から八雲紫、シルフ、ノーム、ウンディーネ、サラマンダーだ。紫たち、こいつはアクノロギア。新しい仲間だ」

紫たちは軽くあいさつをする

ショウブ「それじゃ俺たちはあいつらの所にいかなきゃいけねぇから」
紫「またあいましょう」
ショウブ「おう。お前も幻想郷の管理、がんばれよ」

・・・・・・・・・・・・
ショウブ「……ということがあったんだ」
ナツ「幻想郷ってショウブが住んでたっていう？」
グレイ「てか管理ってかなりの実力者じゃねぇか！！」
ルーシィ「それにシルフ、ノーム、ウンディーネ、サラマンダーって、有名な精霊じゃない！！」
マカロフ「規格外じゃのう」
ショウブ「ははっ。まあさっさと帰ろうぜ」

『『『ああ！！／ええ！！』』』

・・・・・・・・・・

ティーボ「おいおーい、今日は一段と人が少ねぇなぁ。ギルドってよりこれ何よ？同好会？」

そう言ったのは　黄昏の鬼のティーボだった。

マカオ「ティーボ！！支払いは来月のはずだろ！？」

ティーボ「うちのマスターがさぁ、そうはいかねぇって。期日通り払ってくれねぇと困るって、マスターに言われちゃしょうがねぇんだわ」

黄昏の鬼の面々は気色の悪い笑いをする

ロメオ「ふざけんな」

マカオ「よせロメオ！！」

そんなティーボたちにロメオは睨み付ける

ロメオ「お前らに払う金なんかねぇよ」

ティーボ「んだクソガキその態度」

ロメオ「こんな奴らにいいようにされて、父ちゃんもみんなも腰抜けだ！！」

ロメオは右手から紫色の炎を出す。

ロメオ「俺は戦うぞ！！このままじゃ　妖精の尻尾の名折れだ！！」
マカオ「よせロメオ！！」
ワカバ「あのバカ！！」
「フッ」

ティーボがロメオの炎に息を吹き掛けると、それはすぐに消えてしまう

ティーボ「名前なんかとっくに折れてんだろ？」

ティーボは背中の金棒に手をかける。

マカオ「やめろー！！」
ティーボ「てめぇらは一生、俺たちの上には行けねぇんだ！！」

ティーボがロメオに金棒を振り下ろそうとした時、突然後ろから現れた男に蹴り飛ばされて宙を舞い、壁へとぶつかった

「「「「んだてめぇら！！」」」」

他の　黄昏の鬼が怒って後ろを向くと、一人は氷で凍らされ、一人は剣で斬られ、一人は土で蹴られ、一人は巨大な手に押し潰される

ナツ「へへっ。ただいま！！」
ハッピー「みんなー！！」
エルザ「久しぶりだな」

ウェンディ「お待たせしました」
シャルル「フン」
グレイ「今戻った」
カナ「酒だ酒ー！！」
マカロフ「なんじゃ！この小さいギルドわ！」
ショウブ「よう」

そこには7年前に消息を絶ったナツたち全員の姿があった

マカオ「お…お前ら…」
ワカバ「マジか！！」
リーダス「若い！！」
ラブ「7年前と変わってねぇじゃねぇか！！」
ビジター「どうなってんだ！？」

消息を絶った時と変わっていないナツたちを見て、マカオたちは歓喜の涙を流す

・・・・・・・・・・

マカロフ「とまぁ…」

マカロフから天浪島での説明があり、ギルドの皆は聞き入っていた。
すると、ナツがロメオの視線に気づく

ナツ「大きくなったなぁ、ロメオ」

ナツがそういうと、ロメオは、涙を流しながら笑顔になる

ロメオ「おかえり、ナツ兄、みんな・・・」

ロメオだけじゃなく、他の皆も大泣きしていた

幻想郷の案内（そっこうで終わる）

・・・

・・・・・・・・・・・・・

ショウブ「…というわけで少しギルドを開けたいのだが」

マカロフ「聞いてはいたがまさか本当に穴倉で暮らしてるとは思わんかったわ。うむ、そういう理由なら許可しよう」

するとどこからかナツが現れてきて

ナツ「ショウブたち幻想郷行くのか！！俺も行く！！」

ハッピー「オイラも行きたい！！」

ナツとハッピーの声を聞いてルーシィにグレイ、エルザがやってきた

ルーシィ「え、幻想郷行くの？」

グレイ「俺もいっていいか？」

エルザ「私もいきたいのだが」

ショウブ「そうだな。ついでだし幻想郷の案内でもするか。だが単独行動は許さんぞ」

ナツ「わかった！！」

ショウブ「それなら行くか」

ショウブの足元に魔法陣ができる

ショウブ「魔法陣に乗れ。幻想郷に行く」

ナツ達が魔法陣に乗ると魔法陣ごといなくなってしまった

・・・

ウェンディ「強そうな名前だね」
ショウブ「そりゃこの森の守護竜と主だから強いに決まってるだろ。取りあえず1階に行くか」

・・・・・・・・・・・・・・・
ショウブ「これが幻想郷の地図だ」
『丸い…』
ショウブ「幻想郷は二重の結界に守られてんだ。一番いい形が円形だったんだよ。話を戻すぞ。今俺達がいるのは幻想郷の南にある太陽の畑、その中にある太陽の森だ。まずは太陽の畑について説明する。太陽の畑は向日葵が咲き乱れる場所で上級の中の下級にあたる妖精、妖怪がいる。さらに大昔からすむ上級の植物妖怪、〔風見幽香〕が住んでいる。こいつは〔四季のフラワーマスター〕の異名を持ち、いろんな場所に花を見に行っている。今のでわかると思うがこいつは花が好きだ。特に向日葵がな。太陽の畑の花は幽香が育てたものだ。もし太陽の畑にある花を傷つけたりすとあいつが怒って相手を殺すつもりで襲いかかってくる。しかもあいつは超がつくほどのドS、極めつけにあいつは花を操ることができるから花の声を聞くこともできて咲かない花を咲かせることもできるが、武器にすることもできる。あいつにとっちゃ、太陽の畑はあいつのテリトリーだ。だから太陽の畑に住む妖怪達は絶対に花を傷つけない様にしてる」
「「「こ、怖い」」」
シャルル「なんで怖がってるのよ」
グレイ「その幽香ってやつは花を傷つけなければいいんだろ」
エルザ「なら花を傷つけなければいい」

「「「ああっ！！」」」
ナツ「つまり、花を傷つけなければいいのか」
ショウブ「そうだ。次は太陽の森。ここは太陽の森の奥にある場所だ。あまりにも危険すぎて地図には載っていない。ここの妖怪、妖精はほかとは比べ物にならないほど強い。寄生植物や、見ただけで襲ってくるやつまでもいる。あまりにも危険すぎるため強大な魔力の茨で封じられていて、太陽の鍵というアイテムがないと入ることができないようにしてある。だがここは魔力が多くて研究にはもってこいの場所なんだ。俺はイクセクトキングと契約してここで暮らしているんだ」
ルーシィ「計約？」
ショウブ「魔法の研究成果を知らせること。自衛以外でこの森の者を攻撃しないことだ」
ナツ「魔法の研究してるなら、いろいろな魔法が使えるのか！？」
ショウブ「それは帰ってからな」

それからもショウブは幻想郷の説明を続けた

ナツ「俺地底行きてぇ！！」
ショウブ「死ぬ気か」
グレイ「俺はねぇな」
ショウブ「来た意味あんのか」
エルザ「香霖堂に行きたいのだが」
ショウブ「後で行くか」
ルーシィ「私も行くところはないわ」
ショウブ「やっぱ来なくてよかったんじゃねぇのか」
ウェンディ「天界に行きたいです」

ショウブ「天界に行く前に飛べないだろ」
ハッピー「オイラ大蝦蟇の池と霧の湖に行きたい」
ショウブ「魚は釣れないぞ」
シャルル「私もないわね」
ショウブ「帰れ…たくっ。とそいやぁ調理器具は…」

ショウブが台所にいくと、調理器具は錆びていた

ショウブ「……香霖堂に行くぞ」
『『……』』

・・・・・・・・・・・・
男「やあ、いらっしゃい。珍しいお客さんだね」
ショウブ「久しぶりだな霖之助。今日はこいつらの案内で来ている」
ナツ「よぉ、俺はナツだ」
霖之助「僕は森近霖之助だ」

霖之助は軽い挨拶をしていく

ショウブ「さっきも言ったがここにはいろいろな者がおいてある。必要ならマジックアイテムの作成もできるがどうする？」
エルザ「鎧か剣が欲しいのだが」
霖之助「悪いけどここは僕が趣味で開いてる店でね、集めた物を売っているからそういったものはないんだ」
ショウブ「正確にはあるけど、売る気がないだけどな」
エルザ「あるのか？」
ショウブ「草薙の剣と言う伝説の剣をもっているんだ。希少金属で

ある緋々色金が使われていてその力は霖之助いわく剣を世界を変えてしまうほどの品らしい」
ルーシィ「剣の世界を変えてしまうほどの品！！？？」
ショウブ「この剣は天候を操る力を持つからどちらかと言えばエルザよりもウェンディに合いそうな剣だけどな」
ウェンディ「わ、私！？」
ショウブ「ウェンディは天空の滅竜魔導士だし合ってるだろ？」
グレイ「たしかに天空なら合うな」
ショウブ「ただこれには欠点がある」
『『欠点？』』
ショウブ「ウェンディには体格的に持ち上げられない」
『『ああ、なるほど…』』
ウェンディ「そ、そんなことないもん！！」
ショウブ「だが草薙の剣は１ｍ近くある剣だぞ」
ウェンディ「……」
ショウブ「ああ、そういえば霖之助。家の調理器具が錆びてて完全に使い門になんねぇんだわ。新しいの作ってくんねぇか？」
霖之助「自分で作れるだろ？」
ショウブ「めんどくさいから断る」
霖之助「僕も断るよ」
ショウブ「ちぇ。家で作るか」
エルザ「残念だが帰るとしよう」
ショウブ「そうだな。さっさと帰って家で作るか。と、忘れる所だった、霖之助。玖音と千尋、それから神楽、あいつらに会ったら伝えてほしいことがあるんだ。〔あの竜と会った。あいつはさらに強くなっていた。おそらく近いうちに来るだろう。準備しておけ〕そう伝えておいていてくれ」

霖之助「わかった。伝えておくよ」
ショウブ「じゃあな」

・・・・・・・・・・・・・
太陽の森に帰る途中、日傘をさした緑髪の女性が現れた

女性「あら久しぶりね」
ショウブ「げ、幽香」
ハッピー「でた～！！！！」
幽香「なにその猫」
ショウブ「気にしないでくれ」
ハッピー「妖怪なのに人の姿してるんだね」
ルーシィ「こらハッピー！！」
幽香「…ふふ、いい度胸してるわね。どうやっていたぶってやろうかしら」
ハッピー「お、お前なんか怖くなんか……」
幽香「ふふふ…」
ハッピーは幽香の妖力で黙ってしまう。そこにナツが入る

ナツ「ハッピーを傷つけるな！！」
グレイ「お前！！」
幽香「邪魔よ」
ナツ「ぐあっ！！」
エルザ「ナツがあっさりと…」
ナツ「ぐううう、火竜の咆哮！！」

ナツが咆哮を放つが幽香軽々と避ける

幽香「面白い技をつかうのね。その猫の変わりにあなたの相手をしてあげる」

ナツ「あんな軽々と…」

すると幽香が傘をナツに向ける

ショウブ「やめろ幽香！！」

幽香の傘の先端に妖力が集まり、極太のレーザーを放つ

幽香「元祖［マスタースパーク］」

ショウブ「シルフ！！」

シルフ「まかせて！！」

レーザーが放たれた瞬間、シルフの風により、幽香の攻撃は外れた

幽香「なんのつもり？」

ショウブ「ハッピーの言葉が気に障ったなら謝る。こいつらは俺の大事な仲間だ。お前がこいつらを殺すなら、その前に俺はお前を殺す」

その場に静寂が流れる

幽香「…わかったわ。ここは引いてあげる。青猫、次はないと思いなさい」

ハッピー「あい…」

ショウブはナツを背負う

ショウブ「帰るぞ」

・・・・・・・・・・・・・

ナツ「ショウブ！！俺を幽香のとこにつれていけ！！」

ショウブ「だめに決まってるだろ死ぬ気かお前！！」

ナツ「い～や～だ～！！俺は絶対にあいつに勝つんだ～！！」

マカロフ「ナツが騒いでるようじゃがなにがあったんじゃ？」

ミラ「幻想郷で強い妖怪に瞬殺されたんですって」

ハッピー「オイラ絶対に行かないよ幽香の所に行かないよ…」

ルーシィ「私もよ…」

グレイ「俺もだ…」

エルザ「私もだ…」

ウェンディ「私もです…」

マカロフ「なにがあったというのじゃ…」

ショウブ「暇…」

剣咬の虎

・・・

ナツ「なっはははは、そいつはいいおっもしれえ！！」
グレイ「あぁ？」
ナツ「だってそうだろお、後何回上に登る楽しみがあるんだよ。燃えてきたあ―！！」

そんなナツに呆れるグレイとロメオに笑うルーシィ

ショウブ「久しぶりにシルフ達も暴れたいみたいだしな。楽しみだ」
ウェンディ「そうですよね、うん。楽しみです」
カナ「ねえあんたら、ギルダーツ見なかった？」
グレイ「なんだよ、いつもパパが近くにいないとさみしいのか？」

そう言うグレイにカナがきつめに言う。ルーシィは笑い気にしてない様子だ。そんな様子を物陰からジュビアが見ており、ギルドの壁にヒビを入れていた

エルザ「ギルダーツならマスターと一緒に旧、妖精の尻尾に行ったぞ」

仕事から戻ってきたエルザが玄関から入ってきて言った

カナ「よーし、なら今のうちに仕事行くか～」
ハッピー「ギルダーツのカナへのデレッぷりったらすごいもんね」
シャルル「これでこのギルド最強って言うんだから、変わったギルドよね」
ハッピー「今はショウブが最強だよ」

この時さとり妖怪の心を読む能力をまちがえて使ってしまったショウブは知った

リリー「（お前のシャルルへのデレッぷりもな）」

と、リリーが思っていたことを。リリーがハッピーのことをどう思っているかわかった瞬間だった

・・・・・・・・・・・・

翌日、ショウブの穴倉が消えた。原因は分かっている。ナツだ。ナツがモード雷炎竜のなり、雷炎竜の咆哮を放った。それが原因で穴倉が壊れたのだ。穴倉には生活必需品があり、今日の朝飯もあったのだ。奇跡的に外にいたため、ショウブは無事で原因もわかった

ショウブ「……ナ～～～～ツ～～～～～！！！！！」

シルフの力を借り、全速力でギルドまで駆けていくショウブだった

・・・・・・・・・・・・

ルーシィ「ん？なにかしらあれ？」

ルーシィの見る方向には土煙りが上がっている

「…ツ～～～～！！！…」

《ドドドドドドドドドド》

ウェンディ「なにか聞こえますよ」

「…ッ～～～～～！！！」

グレイ「おいおい、こっちに近づいてきてないか！？」

ショウブ「ナ～～～～～～ッ～～～～～～～～！！！！！」

ナツ「俺？」

ショウブ「風府［疾風迅雷］！！！！！！」

行き成りショウブがナツを蹴り飛ばした

『『えええええええええええ！！！』』

ナツ「なにすんだショウブ！！」

ショウブ「爆弾岩メガンテだ！！！！！」

ウェンディ「ナツさん逃げて！！」

ナツ「は？……ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

メガンテの準備時間の間にウェンディが逃げるように言うがメガンテが発動し、ナツが空高く打ち上げられる

ハッピー「どうしたのショウブ？」

ショウブ「ナツの攻撃で家がなくなったんだよ！！！！！」

ルーシィ「ナツの攻撃で？」

ショウブ「雷炎竜の咆哮だよっ！！！！！」

ウェンディ「たしかにあの家なら壊れそうです…」

ショウブ「妖精［カドラブル・ギガ］！！！！！」

ナツ「ぐぴゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！

……」

四精霊の力を込めた拳で殴られナツは地面に倒れた

ショウブ「ウェンディ、壊れるどころか跡形もなく消しとんだんだが…」

ハッピー「それよりもショウブ、今ポーリュシカって言う妖精の尻尾専属のお医者さんの所にいくんだけど一緒に行く？」

ショウブ「俺はもう少しナツぼこってくからパス…ねんのため言うが絶対に邪魔すんなよ」

『『はいいい！！！！』』

ショウブがドスのきいた声で言うと全員反射的に返事をしてしまった。

ナツ「ショウブ…話せばわかるだろ…」

ショウブ「ああそうだなＯＨＡＮＡＳＩしようか」

ナツ「いやそっちじゃなくて…」

「なにやってるの？」

どこからか少女の声がした。すると急に空間が壊れ、そこから金髪の少女が現れた

ショウブ「空間壊してくんなフラン」

フラン「あはは、ごめんね」

ショウブ「空間の修理は面倒なんだからやめろって言ってるだろ」

フラン「あーえー…！！」

フランが言葉を詰まらせているとなにかに気付いたようだ

フラン「ショウブ、あの人間逃げようとしてるわよ」

ナツ「！！」

ショウブ「ほう、いい度胸じゃないか。フラン今からこいつとＯＨＡＮＡＳＩするつもりだが一緒にやるか？」

フラン「ええ、私もＯＨＡＮＡＳＩしたい」

ナツ「いやあああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

その日ギルドにはナツの悲鳴が木霊した

・・・・・・・・・・・・・・・

ルーシィ「ただいまー」

ショウブ「おお、戻ったか」

ロメオ「父ちゃんにはもう決める権限ねぇだろ、マスターじゃねぇんだから」

マカオ「俺はギルドの一員として言ってるの」

グレイ「何の騒ぎだあ」

シャルル「親子喧嘩にしか見えないけど…」

ショウブ「グレイ服」

マカオ「出たくない人！！」

マカオがそう言って手を上げるとほかのギルドメンバーも手を上げた。ロメオはそれでも反対しなかった

ナツ「さっきから出るとか出ねえとか何の話だよ」
ショウブ「終わったのか」
フラン「ええ」

ナツが頭の上にフランを乗せて戻ってきた

ロメオ「ナツにい達がいない間にフィオーレ一のギルドを決める祭りができたんだ。フィオーレ中のギルドが集まって魔力を競い合うんだ。その名も、大魔闘演武！！」
ナツ「おおおおおおおお！！」
ルーシィ「大魔闘演武！！」
ウェンディ「楽しそうですね！！」
ショウブ「出るぞ！！」
フラン「私も！！」
グレイ「まさに祭りってわけか」
エルザ「なるほど、今フィオーレ一のギルドはたしか、剣咬の虎、だったか」
ロメオ「そう、剣咬の虎を倒して優勝すれば、フィオーレ一のギルドになれるんだ！！」

マカロフはブランクなどをふくめて不安そうだったが、優勝商品のギルドに３０万ジュエルで簡単につられてしまった

ナツ「剣咬の虎か！！燃えてきたぞ！！」
ジェット「やかましい」
ナツ「その大会いつやるんだよ」

ロメオ「３ヶ月後だよ」
ナツ「十分だ！！それまでに鍛え直して妖精の尻尾をフィオーレーのギルドにしてやるう！！」

ほかの者も呆れつつ参加はするようだった

ルーシィ「所でナツ。さっきから頭に乗せてるその子、誰？」
ナツ「あああああ！！フランどけええええええ！！」
フラン「いや」
ショウブ「ナツに代わって説明すると、あいつはフランドール・スカーレット。吸血鬼だ」
グレイ「またかよ…」

グレイも含めギルド全員どこからきたのか予想がつてしまい、呆れていた

ショウブ「数年前幻想郷にきて、霧の湖にある紅魔館に住んでた」
エルザ「住んでた、とは？」
ショウブ「玖音と結婚して、今は人里からすこし離れた場所に住んでる」
ウェンディ「幼い子とですか？」
ショウブ「あれはフランの昔の姿、だいたい五百歳の時だ。今は千歳でもう大人の姿だ。それに玖音は俺と同じで大昔から生きてたやつで妖怪になったのはフランと一緒の方がよかったからだ」
ルーシィ「だけど見た目が…」
ショウブ「俺らほど長く生きてると千歳だろうが一万歳だろうがロリコン扱いされるんだよ！！て言うかそんなこよ言ったら俺はウェ

ンディが好きなんだからあきらかロリコンになるだろ」
ルーシィ「う…」
ショウブ「後最近幽香と引き分けになるほど強くなったらしいから軽い気持ちで挑むなよ。手加減すると思うから、幽香ほどひどくないだろうが…たぶん」
ナツ「だったらフランに鍛えてもらえばいいな！！」
「「え…」」
グレイ「そりゃいいな」
エルザ「幽香と並ぶ程ならいい相手になる」
マカロフ「妖精の尻尾、大魔闘演武出場じゃ～～！！！！」

合宿。海、または旅館の騒動

・・・・・・・・・・・・・・・

エルザ「いいか、この合宿の目的は、7年間凍結封印されていた間のブランクを克服し、3ヶ月後にひかえる大魔闘演武で優勝するためのものだ。妖精の尻尾こそ最強のギルドであるべく、各自この合宿で魔力の向上を図ってほしい」

エルザ以外『おーう』

メイビス「んふふ♪」←内緒でついてきてます

ヤシの木の上から、メイビスはその光景を楽しそうに見ながらトロピカルジュースを飲んでいる

エルザ「ただし、今日一日はフリータイムだ。こうゆう時はメリハリが大切だからな」

エルザ以外『やった〜!』

ナツ「そうと決まれば!!」

グレイ「海が呼んでる!!」

ナツ「泳ぎまくるぞ!!」

ジェット「俺が一番だ!!おっ先ィ!!」

ジェット以外『うわあああぁぁ!!』

ジェットが得意魔法の神速(ハイスピード)で海に向かっていく。その時、砂が巻き上げられ、砂をかぶったり、埋もれているみなだが…

ショウブ「ウェンディ、フラン、大丈夫か」

ウェンディ「うん！」
フラン「大丈夫」

グレイ「ぐう、んんん？ジュビア、ありがとな！」

ショウブとウェンディとフランは防御壁、グレイとジュビアは傘と水で無事であった

ジュビア「いえ、それよりグレイ様ぁ。今日のために新しい水着をかったんですぅ。このドレスの下に纏っているんですが、グレイ様に一番最初に見てもらいたいので、そのぉ、脱がしてくだｓ…」

ジュビアが言い終わるその直前

ナツ・グレイ「「うおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

海に向かって全力疾走していた。

ジュビア「あぁ…」

そんなジュビアのそばに水中メガネと水着をつけたシャルルと、海用キャップと浮わをつけたハッピーがやってきた

シャルル「合宿の目的は男を落とすことじゃないのよ。もっと緊張感持って」

ハッピー「そうだぞー！」

ジュビア「その格好で言われても…」

・・・・・・・・・・・・・

ただ今海で遠泳中

ナツ「どこまでいけるか競争だぁ！！」

グレイ「おめぇの負けに決まってんだろぉ！！」

ナツ・グレイ「「のわああぁぁぁぁ！！！！！」」

ジェットが神速で泳いでいく。ナツとグレイはその後に起きた波で飛ばされていく

ジェット「ショウブにならねぇなあああ！！」

ジェットが調子に乗って泳ぎ続ける。ナツとグレイが海面に出てくる

ナツ「ぶはぁ！！」

グレイ「はあぁ！！」

ナツ「あのやろお！！」

グレイ「だったら俺もスピードアップだ！！」

そう言うとグレイは海に手を突っ込む

ばさあぁ！！

ドロイ「パンツうぅ！？うぶう！！」

そう、水着を脱いだのだ

グレイ「ふっふっふ、全部脱げば水の抵抗はさらに減る。最速最強は…このおれだあぁぁぁ！！」

ナツ「んなあッ！！」

グレイは泳ぎだす

ナツ「だったら俺は…」

ナツの周りに大量の泡ができ始める。そして渦潮ができ、炎が飛び出した

ナツ「火竜のバタ足ぃぃぃぃ！！」

炎を足に纏いながら泳ぎだす

ドロイ「おおぉ、帰ってこれんのかぁ！！」

ドロイがグレイの回パンを持った右手を振りつつ、叫ぶ

・・・・・・・・・・

ただ今ビーチパラソル

エルザ「ふうぅ…あっ」

エルザの目線の先にはジュビアがいた

エルザ「どうした？ドレスを脱がんのか？」
ジュビア「グレイ様に最初にお披露目するまでは脱ぎませんっ！！」

涙目になりつつ、宣言するジュビア

メイビス「勝負水着ですね♪きっと、あむ。んんーん～ん！！」
ヤシの木の上から、メイビスはその光景を楽しそうに見ながらかき氷（イチゴ味）を食べながら見ている。とても冷たくて頭が痛いようだが

・・・

ルーシィ「あはははは！あはは、あっ、そう言えば海で合宿って私達だけだよねぇ？」
ウェンディ「はい。ミラさん達は山で合宿ですし、ラクサスさん達も別の場所で」
ルーシィ「ん～、誰か忘れてるような～…」
ハッピー「ガジルとリリィ」
ルーシィ「あ」
レビィ「秘密の特訓だ、って私も付いていこうとしたら断わられたんだよ」
ウェンディ「ついていこうと？」
ルーシィ「あれぇ、レビィちゃ～ん」
レビィ「ち、ちがう！！そういうのじゃないのおおおぉぉぉぉ！！」

レビィが顔を真っ赤にしながら否定する。ちなみになぜこうなったのかだが天浪島で悪魔の心臓との魔導士との戦いで死にそうになってまでレビィをかばいながら戦ったため…だと思われる

レビィ「そ、そういうウェンディはどうなの！！ショウブのことまだ好きだとわかったわけじゃないでしょ！！」
ウェンディ「あの時は恋っていうのがよくわからなくてそんな回答だったんですけど、もう好きだってわかりましたから」
ルーシィ「へえええぇぇぇぇ。あ、そういえばショウブって今どこにいるの？」
ウェンディ「ショウブはたしかフランさんと一緒にあっちの方にいたと思いますよ」

ウェンディの指指す方向にはたしかにショウブとフランがいた。た

だ…

ショウブ「少し無理やりだが能力の応用で体の細胞を変えてしまえば短時間なら吸血鬼に戻れるとわかったんだ！！これを喜ばれずにいられるか！！久しぶりに訓練してやるからなあ！！！！」

爆弾・呪い・メガザル岩「「そんな無茶な！！！！」」」

四精霊「「「「いくら結界張って周りに被害がないからと言っても！！！！！」」」

ヒドラ種「「「「もっと手加減してください！！！！」」」」

ショウブ「まだまだぁ！！！！てめぇら本気出してもっとかかってこいやぁあああ！！！！」

ショウブの式神達『もう十分本気だしてますからやめてくださいお願いします！！！！！』

ビーチバレー組『うわあ…』

フラン「レーヴァテイン！！！！」

ショウブの式神達『『うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』』

ルーシィ「なんか可愛そうになってきたわ」

レビィ「絶対助けないけど」

ハッピー「うん」

シャルル「そうね」

ウェンディ「ショウブ～！！」

ショウブ「あああああ！！ってウェンディ？どうしたんだ」

ウェンディの姿が視界に移ると、ショウブは攻撃をやめた

ウェンディ「そろそろやめてあげて！！」

ビーチバレー組『勇者がいる！！』

フラン「…あ～たしかに砂浜がすごいことになってるなぁ」
ショウブ「こいつらも7年間戦いなんてしてなかったしなぁ……よし、今日はここで終わりだ、好きにしていろ。明日からの練習はブランク埋めにする。ウェンディに感謝しろよ」
ショウブの式神達『ありがとうございます。奥様！！！！！』
ウェンディ「奥様！？」
フラン「ほら、もうショウブとウェンディの結婚なんて決まったも同然じゃん？だから奥様ってことになってるのよ」
ウェンディ「えええええ！？ショ、ショウブ！！」
ショウブ「怒ったウェンディも可愛いなぁ（ごめんごめん後で言っとくから）」
フラン「ショウブ、本音と建前が逆だよ」
ウェンディ「もうっ」
ショウブ・ウェンディ以外『（いちゃついてるなぁ）』

・・・

ナツ・グレイ「「この俺だ！！」」
ジェット「って、きっと特訓中の皆がそう思ってるだろうなぁ」
ナツ・グレイ「「んなあっ！！！！遊んでる場合じゃねえぇぇ！！！！」」

グレイは海上に飛び上がる

グレイ「この海で最強の造形魔法を完成させてやる！！アイスメイク・海！！」
一般客『『『うわあああああああ』』』

海が氷になっていく。一般客にとって迷惑でしかありませんのでやめましょう

ルーシィ「ちょっと！！なにやってんのよぉ！！」
ハッピー「さ、サブィ」
シャルル「まったく」
↑ハッピーの頭の上に避難してます。おかげでハッピーは凍った海の中です。危険ですのでやめましょう

メイビス「ああっ！！」

グレイ「おお、絶景絶景」

ジェット「何が絶景だ！！固めんな！！」

ジェットが青い顔をしながら文句をいう

ナツ「し、心配すんなぁ、ぁぁぁぁぁ。こんなもん俺にかかりゃあ一発で。か、かかかっ、火竜のおぉぉぉぉぉ、翼撃いいいいいいい！！」

ナツが氷を殴る

グレイ「ふっ」

その光景を見て花で笑うグレイ。だが

ナツ「うらあああああああああ！！」

ばきばきばき

グレイ「なにい！？うおおおお！！」

一面の氷が割れて空中に広がる

グレイ「やりやがったな」

ナツ「だあああああ！！」

一般客『『『うわあああああああ！！！！！』』』

ルーシィ「うわあああああ！！」

レビィ「つぶされちゃうううう！！」

エルザ「まったく無茶しすぎだ」

ジュビア「ま、丸見えですよぉ！」
エルザ「心配ない。換装、天輪の鎧！！」
エルザは魔法により瞬時に鎧に着替える
エルザ「ジュビア、これも特訓の一環だ、あの氷を撃墜してビーチを間守れ！！」
ジュビア「あ、はい！」
エルザ「繚乱の剣（ブルーメンブロット）！！」
ジュビア「それじゃあジュビアも！！はぁあ！！」
氷はみるみる砕けていく
メイビス「ああっ、私も！！…ああだめだめ。がまんがまん」

ナツ「おお、エルザ達か」
グレイ「ちゃかり特訓してやがる」
ジェット「俺達も負けてらんねぇ」
ドロイ「やろうぜ！！」
ジェットとドロイも氷を壊していく。ナツとグレイも氷を破壊する
ウェンディ「私もいきます！！天竜の咆哮！！」
ウェンディも氷を破壊する

ウェンディ「やったあ！」
シャルル「ウェンディまで」
レビィ「でも皆、休んでるよりいきいきしてる」
ルーシィ「うん」
ナツ「これで最後だ！！火竜の鉄拳！！」

最後の氷も破壊…できなかった。それどころかヒビ一つ入っていない

ナツ「なっ！！」
ショウブ「エクスプロージョン」

ショウブの魔法で氷は爆発して砕けた

ショウブ「あれは氷が分厚かったから砕けなかっただけだ。あまり気を落とすな」
ナツ「おう…」
ショウブ「だが、さっきの火竜の鉄拳、筋はよかった。３か月真面目に鍛えればあの氷も砕けるだろうな」
ナツ「ほんとか！？」
ショウブ「ああ」
一般客『『『おおおおおおお！！』』』

海には虹が広がっていた

ナツ「いやあ、暴れた暴れたぁ！！」
ウェンディ「なんだか楽しくなってきちゃいました」

グレイ「初日のウォーミングアップとしちゃあこんなもんだろ」
ハッピー「ていううかグレイまだフルチン」
シャルル「羞恥心っていうのはないわけ？」
ショウブ「そんなもんウェンディにみせてんじゃねえよ」
グレイ「すまん」

ルーシィ「ていうか、これってギルドに損害賠償いくよね」
氷に潰された海の家を見てつぶやくルーシィ
レビィ「行く、ね。まあいつもパターンけど。あは、ははははは…はぁ」

メイビス「うふふ、楽しい方達。やっぱり3年目の妖精の尻尾は、最高ですね♪」

・・・・・・・・・・・・・・・
夜になってただ今旅館にいるが、ジェットが文句をいう
ジェット「しっかし、ぼろい民宿だなー」
ナツ「そいやあ、前にアカネビーチに来た時って、すっげえホテル泊ったよな」
グレイ「忘れたのかぁ？あれはロキがチケットくれたから泊れたんだろうが」
ドロイ「まぁ、今の家じゃあ、予算的にここでいっぱいいっぱいだ

よ」
ショウブ「さすがにあそこまでいくと、ギルドの予算復旧と借金返済だけでいっぱいなってマグノリアの旧妖精の尻尾を買い戻すこともまならないし。てか俺の全財産でこれってちょっとおかしいと思うが」
ナツ「んなことより腹へったぞー」
グレイ「よし食いまくるぜ！」

楽しみながら五人が大広間の襖を開くと、全員顔を青にして、口を閉じられなくなった。なぜなら

グレイ「だ、だれだ。女達に酒飲ましたのわ～！！」

そう、この合宿に来た女達が酔っていたのだ

エルザ「足りん！！酒が足りんぞぉ！！」

エルザは怒り上所のようで、すごく怒っていた

ウェンディ「ふにゃあああ。目が回るぅぅぅぅ」

ウェンディは酒に耐え切れず、目を回してダウンしていた

ジュビア「ウェンディぃぃぃぃ、しっかりいいいいいい（泣）」

ジュビアは泣き上所で、泣きながらウェンディをしんぱいしていた

ルーシィ「ねぇねジュビアぁ、遊ぼうよぉ」

ルーシィは普段からは考えられないほど子供っぽくなっており

レビィ「あっはっはっはっは！！たぁーのしぃーい！！」

レビィは笑い上所で、ものすごく笑っていた

フラン「もっと飲もうよ～」

フランは平常運転で、いつもどおりだった

ドロイ「りょ、調理が…」

ジェット「全部くったのかぁ…」

ナツ「信じらんねぇ。なんでお前ら酒飲んでんだよ」

ショウブ「なんで俺はフランに注意しておかなかったのか…」

グレイ「女将ぃ！！なんでここに酒があっ！！」

グレイが女将を呼ぼうとすると杯がグレイの頭に当たった

エルザ「五月蠅いぞグレイ。お前もこっち来て飲め。そして酒を注げ。てか酒を注げええい！！」

グレイ「ちょうぜつめんどくせぇ…あぐはぁ！！」

グレイが小声で文句をいうと酒びんがグレイの頭に当たった

ジュビア「だめですぅ！！グレイ様はジュビアの物。ジュビアの物

なんですぅぅぅ！！（泣）」
エルザ「ええい、放せ」

シャルル「こぉらあ！！ちゃんと走りなさい！！あんたは馬なのよ！！」
シャルルがハッピーの上にまたがっていた。ハッピーの方は涙を流しながらひたすら飛んでいた

ハッピー「ううう。オイラ猫だよぉ…（泣）」
ナツ「おいおい、シャルルまで…」
ナツ「お？ん？」

なにかに気付いナツがそっちを見るとルーシィがいた

ルーシィ「じいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃ」
ナツ「ルーシィ！？」
ルーシィ「じいいいぃぃぃ」
ナツ「な、なんだよ…」
ルーシィ「あああああ、ナツが二人いるぅぅぅぅぅ♪」
レビィ「ルぅーちゃんひっく、ナツが二人もいるわけないじゃんあはははははははは！！」
ナツ「まさに…完済…」

終わったかのようにナツはつぶやく

メイビス「うふふふ」←最初もいいましたが内緒でついてきてます

こちらはジュビアとグレイ

ジュビア「さぁさ、グレイ様。お一つどうぞぉ」

ジュビアは酒瓶を片手にグレイの腕に抱きつく

グレイ「ちょ、ちょっと待て、おい」

ジュビア「うぅぅひっく、グレイ様、昼間ついにジュビアの水着姿を見て下さらず、ジュビアはとってもさびしかったですぅぅぅ」

グレイ「えええ、いやあの、ちょっとおおおお？」

ジュビア「せめて、ジュビアのお酒を飲んでほしかったのに！！飲めないというのなら、だったらいっそジュビアを飲んでぇぇぇ！！」

ジュビアは逃げようとするグレイの腰を泣きながら掴んで体の半分を見ずにし始める

グレイ「がああああ！！！助けてくれえええええ！！！」

こちらはジェットとドロイとエルザ

ドロイ「なあ、俺達、なんで怒られてんだ？…」

ジェット「知るかよ…」

エルザ「誰が私語を許したバカ者がぁぁぁ。座れえ！！（怒）」

ドロイ「もう座ってます…」
エルザ「正座だ」
ジェット「もうしてます…」

するとエルザは剣を抜きだし

エルザ「ええい！！口答えするなぁ！！」
ジェット・ドロイ「ひぃぃぃぃぃぃ！！」

エルザはドロィを掴み

エルザ「おい、ワカバ。お前いつからそんな太った」
ドロイ「俺ドロイっす…」
エルザ「エルフマン、お前いつからそんな小さくなった」
ジェット「俺ジェットっす…」
エルザ「口答えする気か！！そこになおれ！！斬る！！」
ジェット・ドロイ「ひぃぃぃぃぃぃぃ！！」

こちらはショウブとウェンディとフラン
ウェンディ「うぅぅぅ、ショウブぅぅぅぅ…」
ショウブ「ウェンディ、お前いつからそんな積極的になった」

ウェンディはショウブに抱きつきながら名を呼ぶ

フラン「もっと飲もうよ～」
ショウブ「お前は黙っとれ！！」

フラン「扱い酷くない」
ショウブ「そりゃお前がウェンディに酒飲ましたからだろうが」
フラン「私はちょっとしか勧めてないよ」
ショウブ「お前達とウェンディ達じゃ飲む量が違いすぎるんだよ」
フラン「そうかなぁ～？」
ショウブ「一様言っとくがウェンディ達の少しはあの杯いっぱいだからな？俺達のちょっとは神も酔わせる神殺し一瓶だ」
フラン「あんまかわんないじゃん」
ショウブ「変わるわ！！天と地ほど違いがあるわ！！」
ウェンディ「ショウブぅぅぅぅ。キスしてぇぇぇぇ」
ショウブ「ウェンディお前はキスを強要するな！！」

こちらはナツとルーシィとレビィ

レビィ「あーはははははっはははは！！」
ナツ「あはははは…」
ルーシィ「ね～え～」
ナツ「ああ？…」
ルーシィ「卵、はい、あ～ん♪」
ナツ「お前はそんなキャラじゃねえええええ！！」

するとルーシィは部屋の隅で縮こまり

ルーシィ「怒られちゃった」
ナツ「へっ？」
ルーシィ「ナツに怒られちゃった。卵、食べてほしかったなぁ。卵

…」
ナツ「あ～、いや、怒っちゃいないだろぉ」
ルーシィ「じゃあごろごろ～ってしてぇ」
ナツ「ごろ、ごろ？」
ルーシィ「うん。ごろごろって」

ルーシィがあごに指をさしていう

ナツ「はっ、はっはっは…」

ナツがごろごろする

ルーシィ「んにゃあああああお」
ナツ「うわああ！！だあああああああは！！これは妖精の尻尾存亡の危機だ！！男ども集まれ！！作戦会議だ！！」

ナツが叫んで男達を集める。だが

シャルル「あんたはロバ！！い～い、ロバなのよ！！」
ハッピー「あぃぃぃぃ（泣）」

先ほどと変わらずハッピーはシャルルを乗せ飛んいる

グレイ「うわぁ、あっあっ」
ジュビア「グレイ様ぁ、好き好きぃ」

グレイ「やめろぉぉぉ！！俺まで解けるぅぅぅぅぅ！！」

さきどよりさらにグレイが叫び散らしている

エルザ「どこに行ったぁ！！出てこい！！」
ドロイ「足元で…」
ジェット「死んでますなぁ…」

青い顔をしたジェットとドロイがエルザに踏まれていた

ウェンディ「ショウブぅぅぅぅ」
ショウブ「あっこらウェンディ！！お前どこ触ってんだ！！お前酔ってないよな！？絶対酔ってないよな！？」
フラン「もっとやれやれ～！！」
ショウブ「お前も見てないで助けろよ！！」

ナツ「全…滅…」

ナツが棒立ちしていると、ルーシィが後ろから抱きついてきた

ナツ「ひいぃ」
ルーシィ「おんぶしておんぶ」
ナツ「いい、いや、だ」
ルーシィ「おトイレ行きたいぃ。連れてってぇ」

レビィ「ナツぅ～！いっそげぇ～！！あはははは！！」

メイビス「が～んばれ～。ひっく♪」

ナツ「だぁぁクソお！！！めんどくせええ！！！」
ルーシィ「ナツの背中、温かい」
ナツ「おぉ、それは俺の怒りの炎だ…」

・・・・・・・・・・

先ほどの騒動の後、温泉に入ることになった

ウェンディ「はあ～～、やっと目が覚めてきました」
エルザ「ふぅー、全然記憶がないのだが、なぜ男どもはあんなに脅えていたのだ？」
フラン「ショウブは脅えてなかったけどね」
シャルル「ほんと謎ね」
ルーシィ「ん？」

ルーシィが入口の方を見る

ルーシィ「ジュビア、早く！」
ジュビア「ジュビア、恥ずかしい」

メイビス「おおぉぉぉぉ」←何度もいいますが勝手についてきてます

メイビスはジュビアの胸を見て声をだす

メイビス「あっ」

今度はエルザの方を見て、自分の胸と比べてショックを受ける。さらにルーシィの胸を見てショックを受けるが、レビィとウェンディの方を見て落ち着いた

ルーシィ「はあああぁぁぁぁ。気持ちいいい」
ウェンディ「疲れが取れますね」
シャルル「ここの湯は美肌効果があるんだって」
レビィ「ねえ、ルーちゃん」
ルーシィ「なぁにい？」
レビィ「さっきのおんぶ、なぁんかナツと言い感じだったよね」
ルーシィ「おんぶ？」
フラン「覚えてないの？」
ルーシィ「まさか、ナツと／／／／！？」
レビィ「何今更赤くなってんの」
ルーシィ「今更って？」
レビィ「だって、ルーちゃんとナツって」
ジュビア「お互いに好きー、ですよね」
ルーシィ「はいいいいいいいいい！？」
エルザ「ほう、ルーシィとナツがそういう関係だとは知らなかった

な」
ウェンディ「たしかに、いつも一緒にいますね」
エルザ「ああ、ナツを探すなら、ルーシィの部屋を訪ねた方が早いからな」
フラン「そうだったんだぁ」
ルーシィ「あ、う、待って待って待って！！あたしはナツのことなんか好きじゃないし、いつも部屋に上がられて、ほんと迷惑！！だからこの前注意してやろうと後をつけたぐらいだし！！」
エルザ「ほぉう、意趣返しというわけか」
レビィ「きっきたいなあ、その話」
ウェンディ「私も聞きたいです」
フラン「私も聞きたい」
ルーシィ「じゃあ、話してあげる」

お話中…お話中…

エルザ「まぁ、その話を聞けば、リベンジしたくなるのもわかる。奴らにはいまいちそこらへんの常識が欠如しているからな」
シャルル「レディの部屋に勝手に入るなんて常識どころの問題じゃないわよ」
ルーシィ「でしょぉ」

てなわけでまたカット

エルザ「ふっ」
ウェンディ「なんだかいい話」
レビィ「でも結局のろけきかせただけじゃない？」

ルーシィ「なっ、だからちが～う！！」

メイビス「うふふ。あ、ああっ！！」

ナツ「あいつら、さっきは散々なめたなめしてくれたよなぁ」
ジェット「見せてもらうぜ、スッポンポン」
グレイ「ま、温泉きたらお約束ってやつよなぁ」

するとハッピーがふだん裸のくせに腰にタオルを巻いてやってきた

ハッピー「ま、グレイは昼間フルチンだったけどね」
ドロイ「そんなことより腹減ったぁ」

ルーシィ「とにかく明日からは特訓がんばるのみ！！」
ジュビア「そうですね。ジュビアもがんばります」
レビィ「私も」
ウェンディ「私も、もっと強くなります」
エルザ「ふっ」

すると石の転がる音がした

エルザ「ん、何奴！！」

どこから取り出したのか、エルザはクナイ四つ投げた

ルーシィ「どうしたの！？」
エルザ「いや、曲者のけはいがしたような。気の所為か」
レビィ「まさか、あいつらが覗きに？」
ウェンディ「最低です！！」
ジュビア「グレイ様はそんなことしません！！」
エルザ「ナツたちが？ならばかまわんな、よんでこよう」
フラン「そうだね。別にこの姿なら困らないし」
ウェンディ「恥ずかしいですけどショウブだけなら／／／／…」
ルーシィ「だぁめええええ！！」

ナツ「くぅぅぅ、死ぬかと思ったぁぁ…」
グレイ「つきあうんじゃなかったぜぇ…」
ジェット「のりのりだったじゃねえかお前ら…」

ナツ、グレイ、ジェットの三人は額が煙を上げていた。だがドロイは

ドロイ「おおおおお、おお…おおおお…」
ハッピー「ねぇ、なんでそんなとこに刺さってんの？」

尻に刺さっていた。ナツ達が座っていると

ショウブ「あ～やっと温泉入れるな～って、お前らなにやってんだ」
ハッピー「さっきの仕返ししようとしてオイラ以外覗きをしようとしてたんだ」
男達「「「「ハッピー！？」」」」
ショウブ「ふ～ん」

男達とハッピー『（あれ、意外と反応薄い）』
ショウブ「たしかに、あれだけひどいとやりたくなるよな」
ナツ「やっぱりか！！」
グレイ「わかってくれるか！！」
ジェット「俺達の無念を晴らしてくれ！！」
ドロイ「おおおおおお…」
ショウブ「断る」
男達とハッピー『ええ！！』
ショウブ「俺はウェンディの裸以外見る気ねぇし。てか乃時期をするような奴にはお仕置きが必要だよな？向こうにはウェンディもいるんだ。それを覗こうとした罪は重いぞ？」
ハッピー「オイラは何もやってないからいいよね」
男達『ハッピー！！？？』
ショウブ「まあ、いいか。そんじゃ覚悟しろよ。久しぶりにスペカ以外の技使うし加減が効かないかもしれんが。くらえ、紫電砲！！」
男達『ぎゃあああああああああ！！！！』

紫電による砲撃を受けたナツ達は黒こげになった

ルーシィ「え！？何何！？」
ジュビア「なにが起きたんですか！？」
レビィ「魔法だったよ！！」
エルザ「一瞬光ったが」
フラン「あ～、今のショウブ魔法だね。大かたさっきの腹いせに覗きしようとしてショウブにやれたんじゃない」

ルーシィ「やっぱり覗き！！」
シャルル「さっきの腹いせっていうのがよくわからないわ」
フラン「あれ、聞いちゃうの？」
レビィ「なにかあるの？」
フラン「私は構わないけど、後で聞かなければよかったなんて言わないでよ」
ウェンディ「私は知りたいです」
レビィ「私は興味あるかな」
シャルル「私は遠慮するわ」
ジュビア「私は結構です」
ルーシィ「私は聞かないでおくわ」
エルザ「私も聞かないでおこう」
フラン「じゃ、ウェンディとレビィだね」

お話中…お話中…

ウェンディ「あうううう／／／／」
レビィ「うん、ウェンディみたいにならなくてよかった」
フラン「ほかの人も結構ひどかったよ」

ショウブ「フラ～ン！！！！どこだ～！！！！」
エルザ「ショウブか？」
ウェンディ「ひゃう／／／／！！」
ジュビア「そこまで反応するんですか？」
ショウブ「レーヴァテインで俺の持ってたフェニックスの炎奪いやがって！！！！さすがにフェニックスの炎奪われて大人しくしてるほどお人よしじゃねえぞ俺は！！！！さっさと出こんかあああああ

あああ！！！！」
シャルル「なにやってんのよあんた」
フラン「ごめんもう帰るね！！また会おうね！！」

フランは逃げ出した！！

ショウブ「ああああああ！！あんにゃろうグングニルのレプリカうばって行きやがったあああああ！！！！グングニルのレプリカは昔かなり世話になった思い出の武器なのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！！！！」

ウェンディ「ひゃう／／／／」
シャルル「いい加減戻りなさい！」
ウェンディ「だ、だってショウブにあんなことしてたなんて！！」
シャルル「まぁ、それは、そのあれよ、気合いでなんとかしなさい」
ウェンディ「絶対無理いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！！！」

夜の旅館に二人の声が木霊した

・・・・・・・・・・・・・

シャルル「あんた達。遊びにきたんじゃないわよ！！」

ハッピー「そうだぞー」

昨日の遊びの感覚が抜けていないのか。シャルルとハッピーは水着に浮わというどうみても遊びたそうな服装でいう

ドロイ「そんな格好の奴に言われてもなあ」

エルザ「もちろんわかっている、こういうのはメリハリが大切だ。よく遊び、よく食べ、よく寝る」

ドロイ「おい、修行が抜けてるぞ」

ジェット「合宿が終わるころにはせめて俺らぐらいには勝てるようになってもらわねえとなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ジェットとドロイが打ち上げられた

ナツ・グレイ「「うみだ～～～～～！！！！！泳ぎで勝負だ～～～～～～！！！！！砂の城で作りで勝負だ～～～～～～！！！！！大食いで勝負だ～～～～～～！！！！！日焼けで勝負だ～～～～～～！！！！！」」

ナツ「さ、宿に戻って寝るか」

グレイ「うああぁっぁぁぁぁ…」

ドロイ「完全に満喫してやがる…」

ジェット「てか黒っ…」

ウェンディ「あれ～？えっと、これ、なんて読むんだろ？…」
ショウブ「…辞書を使おうとはおもわないのか。まぁそれも可愛いんだけど」
ウェンディ「…聞こえてるよ、ショウブ」
ショウブ「さ、さてなんのことか。ふゅ～～～♪ふゅ～～～～～♪」
ウェンディ「今まで恋人っぽいことしてないし、今度二人でクエストいこう。だめ？」
ショウブ「！！」

上目使いで見てくるウェンディ。まあそんなことされれば当然のことながら

ショウブ「行く！！」
ウェンディ「デート、楽しみだね」
ショウブ「ウェンディ…」
ウェンディ「ショウブ…」

ドロイ「桃色空間ができてやがる…」
ジェット「やばい、口の中が砂糖の味におろろろろろろ」
ドロイ「うわ汚っ！！」
ジェット「ふぁに、はんふぃんひろ。ほれはふぁふぉうら（注・なに、安心しろ。これは砂糖だ）」
ドロイ「……ってあれ？あいつらいつのまに修行を…」

二人の気づかぬ間に、みなそれぞれ修行に入っていた

ナツは水中で火竜の咆哮を撃ち、グレイは氷のドラゴンを作り、ルーシィは魔力の底上げ、エルザは目を閉じ、精神を高め剣の素振り、ウェンディはレビィの風読みのメガネで魔道書を読み、ジュビアは空中に水を集め大きな四角を作り、ショウブは主に精霊や式神の訓練をしていた。そのほかにも訓練をし、それは夜まで続いた

・・・・・・・・・・・・・

ナツ「充実してるなあ」

グレイ「俺達が本気で体を鍛えりゃ」

ウェンディ「二日間といえど、かなりの魔力が上がりましたね」

ショウブ「この調子なら三カ月でもいけそうだな」

ナツ「見てろよほかのギルドの奴ら!!妖精の三カ月を!!炎のトレーニングを見せてやる!!」

ルーシィ「最初はたった三カ月って思ってたけど、効率的に修行すればまだ三カ月もあるのーって感じ」

ハッピー「あい」

すると急にルーシィのしたからバルゴが

バルゴ「姫、大変です」

ルーシィ「うわあ!!どこから出てきてんのよぉ!!」

バルゴ「お仕置きですね」

ハッピー「バルゴ!!」

シャルル「メイドの精霊」

グレイ「そういえばルーシィが七年間凍結封印されてたってことは、その間ルーシィと契約してた精霊はずっと精霊界とやらにいたって

ことか」
ルーシィ「そう言えば星空の鉤の一件でなにげによんでたけどその間に七年もたってたんだった」
ショウブ「おいこらそんな話きいてないぞ」
ウェンディ「ショウブがいない数週間のうちに起きたことですから」
ショウブ「くっそ、そんなのがあると知っていれば…」
ジュビア「可愛そう、ルーシィの所為でルーシィの所為で」
バルゴ「いえ、それは大した問題ではないのですが…」

バルゴが顔を暗くし、俯く

レビィ「何かあったの？」
バルゴ「精霊界が滅亡の危機なんです。みなさんどうか助けてください」
『『えええええ！？』』
バルゴ「精霊界にて王がお待ちですみなさんもつれてきてほしいと」
ナツ「よおしまかしとけ、友達の頼みとあっちゃあ」
ルーシィ「まって、精霊界に人間は入れないはずじゃあ」
バルゴ「精霊の服を着用すれば、精霊界にて活動できます。行きます」
ルーシィ「ちょ、まだ心の準備が…」

ルーシィが言いきる前に転移が発動した

『『うわあああああああ！！！！』』

ジェット「なんで俺達だけ」
ドロイ「置いてきぼりぃ」
砂浜にたたずむ二人はギリギリ魔法の範囲に入っていなかったようだ
・・・・・・・・・・・
『『うわあああああああ！！』』
精霊界についた皆は、とてもおどろいているようだ
ルーシィ「ここが精霊界…」
ウェンディ「ああ、綺麗」
「よく、きたなあ。古き友よ」
ルーシィ「あっ」
ナツ「でかっ！！」
ハッピー「ひげえ！！」
ルーシィ「精霊王！！」
エルザ「お前がここの王か」
ウェンディ・レビィ「「お前って言ったぁ（小声）」」
精霊王「いかにも」
ルーシィ「精霊界が滅亡の危機って！？」
精霊王「ん～～」
精霊王とルーシィは無言のまま見つめあうすると精霊王は笑みを作った

ルーシィ「えっ」
精霊王「ルーシィとその友よ。時の呪縛からの期間を祝して、宴じゃあああ！！！」

するとルーシィの契約した精霊達が急にでてくる。全員ぽかんとしている

ルーシィ「…精霊界滅亡の危機って！！」
バルゴ「…てへっ」
ルーシィ「何いいいいいいいい！？」
タウロス「モー、騙して済まねえっす。騙されてぽかんとしてるルーシィさん！！しかも精霊界のコス最高！！」
キャンサー「驚かせようと思ったエビ。今からでも宴様にカットが必要とあれば言ってくれエビ」
ショウブ「じゃあ宴までの間の時カット」
キャンサー「え…」

精霊王「さあ、今宵は多いに飲め。歌え、騒げや騒げ。古き友との宴じゃあ」
『『『うおおお

ウェンディ「ホロロギウムさん」
ホロロギウム「おやおや」
ウェンディ「あの時は、どうもありがとうございました」
ホロロギウム「いえいえ礼には及びません」
ウェンディ「でもぉあの、服が脱げたのは恥ずかしかったです／／／」
ホロロギウム「いや、あれはそのぉ…」
ルーシィ「失礼しましたぁ、と申しております」

ウェンディとホロロギウムはハデスとの戦いの時のことを話している

アクエリアス「いつかの、ルーシィと合体した女ね」
ジュビア「合体って」
アクエリアス「男はできたかい」
ジュビア「いえ、その」
アクエリアス「はあああああ、情けないねえ。そんなんじゃルーシィみたいになっちゃうよ」
ルーシィ「どういうことよ！」

ジュビアとアクエリアスは男のことで話を

レビィ「わああ、すっごおおい。みたこともない本ばっかり」
クルックス「ほま、お見上げに一冊だけ」
レビィ「え！？」
クルックス「ＺＺＺ…ＺＺＺ…」

レビィ「寝たっ！？」
ルーシィ「大丈夫。考え中だから」

レビィとクルックスは本のことで話を

プルー「ぷぷー」
ハッピー「プルー」
シャルル「よいやあこれも精霊だったわね」
『『『『ぷぷー』』』』
ハッピー「うはあいっぱいいる！！」
シャルル「あーははははは！！」
ジェミニ「「ニコラはたくさんいるものだよ」」

ハッピーとシャルルはニコラに埋もれて、ジェミニはその大群に対する豆知識を

タウロス「エルザさ～ん、おっぱいゆれるナイスバディで！」
エルザ「そうか？」
タウロス「ちょっとトビ跳ねてくれませんか！？」
エルザ「なぜだ？」
レビィ「あの精霊いや」
ウェンディ「私もです…」

タウロスはいつもの変態ぶりを発揮してものすごい嫌われていた

ショウブ「精霊王はかわらねえなあ」
精霊王「余は、古き友の一人と出会え、とてもうれしいぞ」

ショウブ「ところでシルフ達とお前、どっちのが強いんだ？」
精霊王「もちろん、シルフ様に決まっているだろう」
ショウブ「あ、そうなの。よかった４人とも」
『うん』
精霊王「４人、ということは、ノーム様、ウンディーネ様、サラマンダー様も、いるのか」
ショウブ「そうだな」
精霊王「おお、なんという、ことだろうか。ぜひ一度お目にかかりたい、ものだ」

ショウブは精霊王とシルフ達についての話を

ナツ「うんめえ。なんだこの食いもん！！あむ」
キャンサー「蟹のベスカトーレ、星屑バター添え」
アリエス「そっちはハマルソースの子羊ステーキです」
ナツ「うっうう、ごめんなさい……」

ナツは料理の材料を聞いて顔を青くし、泣いていた

グレイ「それにしても不思議な所だよな」
ルーシィ「私も精霊界がこんな風になってるなんて知らなかった！私のプルーどれだろう」
精霊王「それは当然。古き友で、ここに招いたのは、そなたが初めて」
グレイ「それだけ認められてるってとだな」

宴を楽しみまくったナツ達。いよいよ帰りなのだが

ナツ「さぁてだいぶ遊んじまったし、帰ったらたっぷり修行しねえとな」

グレイ「そうだ。三カ月でほかのギルドの奴に追いつかねえと」

ハッピー「打倒剣咬みの虎だよ！！」

バルゴ「あ、そういえば一つ、言い忘れていたことが」

ナツ「ああ？」

ショウブ「あっ……やべ。俺も忘れてた」

バルゴ「精霊界は人間界とは時間の流れが違うのです」

ナツ「まさかそれって」

ショウブ「いやナツ、お前の思ってるような物じゃない」

ナツ「え？」

ショウブ「バルゴ、ここで何分使った」

バルゴ「１４４０分です」

ショウブ「うへえ、さすがにそれだけの時間俺でも戻せねえわ」

グレイ「どういうことだ？」

バルゴ「精霊界で一日過ごすと人間界では……三カ月経ってます」

ナツ・グレイ「「え……」」

ジェット「皆～待ちくたびれたぜ！！大魔闘演武はもう五日後だぜ！！」

ドロイ「すげえ修行してきたんだろうなぁ！！」

『『……』』

ショウブ「お前らそっとしておいてやれ」

ジョット・ドロイ「え？」

「「「終わった」」」

エルザ、ナツ、グレイは砂浜に倒れた。ウェンディは泣きだしてしまった。ほかの者は棒立ちしている

ショウブ「すまん、いくら俺が一様時を操れると言っても、止めるたり早めるのに比べて過去に干渉するのはすごいちからを使うんだ。過去に行くのならともかく、三カ月もの時間を巻き戻すとなると無理だ。ほんと、すまん。俺の力不足で…」

ルーシィ「……ひげ～～～～！！！時間返せ～～～～～～～！！！」

魔女の罪（クリムソルシエール）

・・・・・・・・・・・・・

ショウブ「…んでさ、精霊王、あのピー爺の所為で三カ月時間が経ったわけだが…どうする」

エルザ「私に聞くな…」

ハッピー「精霊界でたった一日過ごしただけで」

ナツ「大事な修行期間が…」

グレイ「三カ月もたってるなんて…」

ルーシィ「私達ど～しよ～…」

ウェンディ「……」

ジュビア「……」

ショウブ「聞いちゃいねぇし。どうすっかなあ」

修行期間がなくなり大魔闘演武が五日後となっているため落ち込むを通り過ぎて放心している。さすがにここまで気力がなくなるとショウブも困っている

バルゴ「ご安心ください姫。私にもっときつめのお仕置きを」

とバルゴ急に変態発言をしだした。ルーシィは、「帰れば……」としか言えなかった

・・・・・・・・・・・・・

ドロイ「むしゃ大魔闘演武までむしゃ、むしゃ五日しかねえのにむ

しゃ」
ジェット「全然魔力が上がってねえじゃねえか」
ショウブ「あの爺の所為だと言っておこう」

レビィ「今回は他のみんなに期待するしかなさそうだね」
ジュビア「はぁ」

ハッピー「またリリィとの力の差が開いちゃうよ」
ウェンディ「え！？」
シャルル「え、あんた気にしてたの！？」

エルザ「んううう、今からでも遅くない、五日間で地獄の特訓だ。お前ら全員覚悟を決めろ。寝る暇はないぞ！」
ルーシィ「ひいいいいい！！」
グレイ「エルザの闘志に、火がついちまった」
ナツ「いいじゃねえか、地獄特訓燃えてきたあああああ！！」
エルザ「よし、私に続け。ナツはランニングだ！」

気合いを入れて特訓しようとすると、空から白い羽が落ちてきた。
上を見るとエルザの頭に鳩がいた

ルーシィ「ハト？」
グレイ「足になんかついてるぞ？」
ナツ「メモがついてるぞ、どらどら」
ショウブ「伝書鳩か？」
ジュビア「まさか、グレイ様からの恋文！？」
グレイ「んなわけねえだろ！」

ハッピー「なになにー、妖精の尻尾へ。西の丘にある壊れたつり橋まで来い」
ナツ「なんだよ偉そうに！」
グレイ「ああ、来いって命令口調な所が気に入らねえ」
ショウブ「気にするとこそこかよ」
ウェンディ「どうしますか？」
シャルル「なんか怪しいわよ」
エルザ「いや、行ってみよう」
レビィ「でも罠かも」
ルーシィ「そうよ、やめといた方がいいって」
エルザ「行けばわかる」
ナツ「ああ、面白くなってきた！！」

・・・

グレイ「これは」
レビィ「橋が」
ジュビア「直った」
グレイ「向こう岸につながったぞ」
エルザ「わたってこいと言うことか」
レビィ「やっぱりわなかもしれないよ」
ウェンディ「なんか怖いです」

ナツ「誰だか知らねえけど行ってやろうじゃねえか」
ルーシィ「じゃあナツからね」
グレイ「さあ、いけっ！！」

と、ナツの背中をグレイが押す

ナツ「どわぁ！！とっとっとっとっとっと。急に押すんじゃねえ、びっくりすんだろうが！！」

と、橋が今もなお激しく揺れている。すると…

ナツ「ぬっおっぅぅぅぅぅ」

なぜか酔った

グレイ「あいつつり橋でも酔うのか」
ショウブ「大丈夫かあいつ？」
ナツ「ウレイ、つり橋野郎、なめんなよ！！うおおおおおおおおお

おおおお！！」

ナツがつり橋をぶじ超え、こちらを見て笑みを浮かべる

ルーシィ「この橋、誰かが渡ったらぜっったいに落ちると思ってたけど」

ウェンディ「大丈夫でしたね」

エルザ「ナツ安全が確認された。みんないくぞ！」

とエルザの声で全員進む。後ろでナツの声叫び声が聞こえた気がするが気のせいだろう

・・・・・・・・・・

ナツ「くるならきやがれ～」

エルザ「ああ、強い相手ならいい特訓になる」

グレイ「お前特訓のことしか頭にねえのか」

ショウブ「（グレイとジェットとドロイはせめて水着の上になにか着ろって感じだがな）」

そんな話をしていると急にエルザが手を出し進むのを止めた。先を見るとローブをはおった三人の人影が見える

ルーシィ「誰かいる」

ジュビア「みなさん、気をつけて」

ショウブ「ん～、この気配、なんかどっかで…」

三人が近づいてくると、フードの中が見てくる

男「来てくれて、ありがとう…」

真ん中のローブを被った男が言う。すると三人ともフードを外す

「…妖精の尻尾」

それはジェラール、メルディ、ウルティアの三人だった

エルザ「ジェラール」

ジェラール「変わってないな、エルザ。もう俺が脱獄した話は聞いているか」

エルザ「ああ」

ジェラール「そんなつもりはなかったんだけどな…」

ウルティア「私とメルディで牢を破ったの」

メルディ「ん？私は何もしてない。殆どウルティア一人でやったんじゃない」

ジュビア「メルディ…」

メルディ「ん？ジュビア、久しぶりね！」

ジュビア「あっ」

一瞬戸惑うものの、笑みを浮かべる。

ジュビア「（こんな素敵な笑顔を作れるようになってたのね）」

ルーシィ「ジェラールが脱獄！？」
ナツ「こいつら、グリモアの…」
グレイ「まあ待て、今は敵じゃねえ。そうだろ」
ウルティア「ええ。私の人生の中で犯してきた罪はとてもじゃないけど一章では償いきれない。だから、せめて私が人生を狂わせてしまった人たちを救いたい、そう思ったの」
ウェンディ「人生を狂わせてしまった人々…」
ウルティア「たとえばジェラール」
ジェラール「いいんだ、俺もお前も、闇にとらわれていた。過去の話だ」
エルザ「ジェラール、お前記憶が」
ジェラール「はっきりしている。何もかもな」
エルザ「ッ！？」
ジェラール「六年前、まだ牢にいるときの記憶が戻った。エルザ、本当になんと言えばいいのか」
ウルティア「楽園の塔でのことは、私に責任がある。ジェラールは私が操っていたの。だから、あまり責めないであげて…」

ショウブ「（空気をぶち壊すようだから言ってないけど話についていけない）」

ジェラール「俺は牢で一生を終えるか死刑。それをうけいれていたんだ。ウルティア達が俺を脱獄させるまでわな」
ウェンディ「それって何か生きる目的ができたってことですか？」
ジェラール「ウェンディ、そういえば、君が知っているジェラール

と俺は、どうやら別人のようだ」
ウェンディ「あ、はい、そのことはもう解決しました」
ジェラール「生きる目的。そんな高尚なものでもないけどな」
ウルティア「私達はギルドを作ったの。正規でもない、闇でもない、独立ギルド魔女の罪、クリムソルシエール」
レビィ「独立ギルド？」
ハッピー「どういうこと？」
シャルル「連盟に加入してないってこと？」
ドロイ「魔女の罪。聞いたことあるぞ」
ジェット「ここ数年で、数々の闇ギルドを壊滅させてるギルドがあるとか」
ウルティア「私達の目的は、唯一つ」
ジェラール「ゼレフ」
『『『ッ！？』』』
ジェラール「闇ギルド、この世の闇を全て払うために結成したギルドだ。二度と俺達の様に、闇にとらわれた魔導士を生み出さないために」
ナツ「おおっ！！」
ルーシィ「それってすごいことよね！！」
グレイ「評議会で正規ギルドに認めてもらえばいいのに」
ジェラール「脱獄犯だぞ」
メルディ「私達、元悪魔の心臓だし～」
ジェラール「それに正規ギルドでは表向きでは闇ギルド相手とはいえ、ギルド間抗争禁止条約が入る。俺達のギルドの形はこれでいいんだ」
ウルティア「で、貴方達を呼んだのは、別に自己紹介のためじゃないのよ大魔闘演武に参加するんだってね」

ナツ「お、おお」
ウルティア「過剰に私達も近づけない。だから貴方達に一つ頼みたいことがあるの」
ナツ「誰かのサインが欲しいのか？」
ショウブ「まじめな顔してふざけたこと言ってんじゃねえよ」
ジェラール「毎年開催中に妙な魔力を感じるのだ。その正体を突き止めてほしい」
ナツ「なんじゃそりゃ」
ルーシィ「大魔闘演武にはフィオーレ中のぎるどが集まるんでしょ」
レビィ「怪しい魔力の一つや二つ…」
ジェラール「俺たちも初めはそう思っていた。しかしその魔力はゼレフに似た何かだった」
ショウブ「つまり、「エーテリオン」みたく、ゼレフの遺産の一つ、もしくはゼレフ本人と言いたいのか」
ジェラール「そうだ。それはゼレフに近づきすぎた俺達にだからわかるのかもしれない」
ウルティア「私達はその魔力の正体を知りたいの」
ジェラール「ゼレフの場所を突き止める手掛かりになるかもしれないしな」
メルディ「もちろん勝敗とは別の話よ。私達も陰ながら妖精の尻尾を応援してるか、それとなく魔力の正体を探ってほしいの」
エルザ「雲を掴むような話だが、受けあおう」
ウルティア「助かるわ」
グレイ「いいのか、エルザ」
エルザ「妙な魔力にフィオーレ中の魔導士が集結してるとなると、私達も不安だしな」
ウルティア「報酬は前払いよ」

「「食事！！」」
ウルティア「いいえ、報酬はお金じゃないの。私の進化アした時のアークが、貴方達の能力を底上げするわ」
「「「え？」」」
ウルティア「パワーアップ、と言えば聞こえはいいけど、実際はそうじゃない。魔導士にはその人の魔力を決める、器の様なものがあるの。たとえその器がからになっても、大気中のエーテルナノを吸収して、しばらくすればまた、器の中は元道理になる。ただ、最近の研究で、魔導士の持つその器には、普段使われていない部分があることが判明した。それが誰にでもある潜在能力、第二魔法源（セカンドオリジン）」
ナツ「第二魔法源？」
ウルティア「時のアークがその第二魔力源を成長させ使える状態にする。つまり、いままで以上に活動時間が増え、膨大な魔力が使えるようになる」
『『『おおおおおおおおおおおおおお！！』』』
ウルティア「ただし、創造を絶する痛みと戦うことになるわよ」
ショウブ「どうでもいいけど大気中のエーテルナノが魔力の源なら、それを過剰摂取すればナツとウェンディはドラゴンフォースが使えるんじゃないのか？」
ウルティア「それは無理。それぞれの造成に会う場所で、なおかつエーテルナノが大量にある場所じゃないといけないもの」
ナツ「ドラゴンフォース？」
ジェラール「君が六魔将軍（オラシオンセウス）のゼロとの戦いで俺の炎を食べた時や、楽園の塔でエーテリオンを食べて膨大な魔力と竜の力を使えたあの状態さ。もっとも、自由に発動できないみたいだけど」
ナツ「その状態に自由になれたら楽じゃねえか！！」
ウルティア「だからそれができないの！！それで、どうするの？第

二魔力源の成長、する？しない？」
ナツ「やる～！！ありがとう、だんだん本物の女に見えてきた！！」
グレイ「まだ引きずってやがったか」
ショウブ「まあ、想像を絶するって言ってるぐらいだし、痛み止めぐらいしてやるよ。潜在能力を無理やち引き出すんだから、気休め程度だがな」

・・・・・・・・・・・・・・・
ナツ「がっあっあっあっあっあっあがあああああああああ」

夕方、ナツは現在砂浜で痛みに耐えている。痛すぎてもはや白目をむいている。これでもショウブの痛み止めつきである。なかったら完全に意識が飛んでいただろう

ナツ「ぐううう。ああああああ。があ、ああああああああああああ！！」
グレイ「服脱がなきゃ魔法陣かけねえのか…」
ルーシィ「あんたはそれ心配しなくていいんじゃない…」
ウルティア「がんばって、潜在能力を引き出すのは簡単なことじゃないの」
ルーシィ「そういえばショウブってどこ行ったの？ナツに痛み止めした後どっか行っちゃったけど」
グレイ「ああ、そこだよ」

ぐれいの指差す先には、頭を打ち付けたり、結界にぶつかったり、砂が鼻に入っても気にしないほどに、声にならない悲鳴をあげもだえ苦しんでいるのと、ウェンディが天空魔法で回復させているのが

見える。ルーシィはナツよりも痛そうにしているのと、あそこまで苦しむショウブを見たことがなかったことに対する驚きで何をしているかグレイに聞く

グレイ「吸血鬼の状態になれるように、能力の応用で遺伝子組み換えしてんだとよ」
ルーシィ「もの凄い痛そう…」

ナツ「ぐあああああああああああ！！あああああああああっあああああああ！！」
ルーシィ「ちょっとこれ大丈夫なの？」
グレイ「どんだけの痛みなんだよ…」
メルディ「感覚リンクしてみるー？」
グレイ「ふざけんな！！」

ああ軽いジョークも言えるようになったのね、とジュビアが関心しているが、本人が了承すれば本当に感覚リンクしていることだろう

レビィ「わ、私達もあれやるの…」
ウェンディ「泣きそうです…」
シャルル「てもう泣いてるじゃない」

ショウブの治療をしながら泣いているウェンディ。こんなときにも可愛いと思ってしまったショウブは新しい扉開けたのかということに対する悲しみに後から苦しむこととなる。ところで泣きながらやっているがショウブの方は大丈夫だろうか。さらに激しく苦しみだ

した気もするが気のせいだろう。むしろそう思いたい

ドロイ「俺らには関係ねぇし…」

ジェット「帰ろうかな…」

ナツ「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ…うがあああああああああ」

ハッピー「ナツ…」

シャルル「そういえばエルザは？」

ハッピー「ジェラールと二人でどこか行ったよ」

エルザとジェラールは海岸でラブ込めしていたとだけ言っておこう。そして夜になるとショウブ、エルザ、ジェット、ドロイとハッピー、シャルルのエクシード二人以外は第二魔法源の引き出しをしていた。砂浜には苦痛に耐える悲鳴が木霊する

ジェラール達は旅立ち、苦痛に耐える悲鳴は相変わらずだ。大魔闘演武に間に合うのかが不安ではあるがきっと明日の朝には終わっているだろう。

大魔闘演武開催はもうすぐだ

修行が終わって

・・・

エルザ「あの家にか？」
ショウブ「あ～、今回は掃除にいくだけだよ。幻想郷の方にある家だけどな」
ナツ「お、じゃあ幽香にあえるのか」
ショウブ「今のお前じゃまだ敵わんよ。じゃ、いってくるわ」

そう行ってショウブは前に使った魔法陣を使って行った。

ナツ「そういえばあの時はすぐ外に出たからショウブの家はよく見てなかったよな」
ルーシィ「たしかに…ってまさか！！」
ナツ「魔法陣残ってるし、行ってみねえか」
ハッピー「おおー」
グレイ「いいなそれ！」
エルザ「私も気になるな」
ウェンディ「私も気になります」
シャルル「ちょっとウェンディ！」
ナツ「そうと決まれば行くぞ～！！」

・・・・・・・・・・
ナツ「あの時の地下だな」
ハッピー「うん」
グレイ「だな」
ナツ「取りあえず適当に回ってみるか」

ルーシィ「ちょっと、大丈夫なの」
ショウブ「そうだぞ」
ルーシィ「……」

全員が、ギ・ギ・ギ、と音が鳴りそうな感じで振り返る

ショウブ「なあ、お前ら」
ウェンディ「ショウブ…怒ってる？」
ショウブ「人の家にかってに入るのは不法侵入なんだぜ」
ナツ「え、あ、いや、これわ…」
ショウブ「まあ、いいけどよ。勝手に動くと普通の人間なら簡単に死ねるからな。気をつけておけ」
ウェンディ「怒ってないの？」
ショウブ「怒ってると言えば怒ってるがどうしようもないからな」
ウェンディ「え？」
ショウブ「あれ、見てみろよ」

ショウブが指さす方には鏡が見える

シャルル「なにも映ってないじゃない」
ショウブ「いや、よく見てみなって」

そういわれて見てみると鏡に何か映っている

エルザ「これは…」

それはショウブの家の玄関だった。が、その前ではアクノロギア（

命名：ロギア）と七色の竜と巫女とスライムとなんかゴツイ虫見たいな奴が戦っている。

ルーシィ「うわぁ」
グレイ「ひでえなこりゃ」
ショウブ「ロギアと太陽竜と霊夢と神楽のスラリンが戦ってるんだよ。おかげで家の周りは荒れまくり。しまいにはイクセクトキングまでででてくる始末。俺がやってもいいんだがやるともっとひどくなるからな、もう放置してんだ」
ハッピー「すごい状態だね」
ショウブ「と、折角来たんだ、飯でも食ってけ」
ナツ「いいのか！？」
ショウブ「ああ。ま、いまから調理するから時間かかるが」
ナツ「いい！！」
グレイ「飯が食えるとわ。てっきり追い出すかと思ってたぜ」
エルザ「私もだ」
ショウブ「さーてと「フグ鯨」と「ガララワニ」、「虹の実」、あとに「ビックリアップル」とってきますか」
ウェンディ「今からとてくるの？」
ショウブ「ん？ああ、食料庫に放し飼い状態だしな。なんならついてくるか？」
ナツ「行きたい！！」
グレイ「俺もだ！！」
エルザ「私も興味がある」
ウェンディ「わ、私も！！」
ルーシィ「わ、私は遠慮しとくわ」
ハッピー「おいらも」

シャルル「私もパス」
ショウブ「じゃ、いくぞー」

・・・・・・・・・・・・・
今、どう見ても洞窟にしか見えない所を通っているショウブ達
ショウブ「まずはフグ鯨だな」
『フグ鯨？』
ショウブ「普段は深海にいるが１０年に一度産卵のために浅瀬にくるんだよ。それがいまその十年目」
ナツ「深海にくらすのか？」
ショウブ「ああ、その間にうま味や老廃物がたまって行ってすごい珍味になるなんだ一匹三億もの値段がする超高級食材だな」
エルザ「ほう」
ショウブ「ほれ急いできたからな、もうついた。そこにいる白いのがフグ鯨だよ」

そこには５０～６０ｃｍほどの白いフグがたくさんいる

ショウブ「ま、うまいんだが欠点があるとすれば、老廃物が毒袋としてたまっててな、それがすごい強力なんだ。個体によって毒袋の位置が違って、それを切っちまうと全身に毒が回って食えなくなる」
ウェンディ「ど、毒」
ショウブ「下手に刺激を与えるな。少しの刺激で全身に毒が回る。捕えるときはこいつを使って首元の神経を痙攣させろ。そうすれば毒袋を切らなければ毒はでねえ。こんな感じだ」

ショウブはたくさんのフグ鯨の一匹にそっと手を添えると首元に機械を押し当てる

ショウブ「初めてだし、一匹取れればいい方か。がんばってとってこい」

『おお！！』

するとたくさんのフグ鯨の一部が紫色になった

『え…』

ショウブ「いまの大声でフグ鯨が驚いて毒が回ったな」

ナツ「はあ！？」

ウェンディ「あ、また一匹紫に」

グレイ「あの紫のフグ鯨食えないのか？」

ショウブ「毒の致死量は常人で０．２㎎、鼠１０万匹を殺すほどの超強力な毒だが、それでもいいなら」

グレイ「や、やめておく…」

ナツ「ふざけんなフグ鯨～！！」

ショウブ「おい、こいつ止めないとフグ鯨が全滅するぞ」

そうショウブが言うと三人が急いでナツを止める

グレイ「おい、やめろナツ！！」

エルザ「フグ鯨を食いたくはないのか！！」

ウェンディ「落ち着いてくださいナツさ～ん！！」

その間もフグ鯨は紫になる

ショウブ「もうこいつは後で俺がとっておくから次行くぞ次」

・・・・・・・・・・

ショウブ達は大きな沼にいる

ショウブ「おおう、沼蛇がやられてる。ガララワニはこいつと同じぐらいのはずだが」

エルザ「ちなみにガララワニはどのような味がするのだ」

ショウブ「一切れ３万程で売れるもので、高級タラバガニと霜降り肉を合わせたようなうま味のするもので有名だな」

ナツ「おお！！」

ショウブ「ただ、年と共に獰猛さと強さがましていく。一般的のが１５０歳だな」

すると沼から何かが出てくる。それは８本の足を持つワニ。赤い体だが、目は緑色で不気味に輝いている。体調３０ｍ程である

グレイ「でかっ！！」

ショウブ「あららこれ１５０とか３００どころか６００ぐらいだな」

ガララワニが口を開くとそこには大量のヒルがいる

ウェンディ「ヒルーーーーー！！」

ショウブ「ヒルで血を吸わせて、その匂いを追って獲物を食ってるんだ。ところで、この程度相手にもならんと思うがどのぐらい実力

が上がったか確かめてみるか？」
ナツ「ああ！！久しぶりに喧嘩だ！！」
グレイ「ワニだかなんだか知らんがちょうどいい」
エルザ「どれほどの腕かきになるものだ」
ウェンディ「ヒル…」

ちなみに厳しい修行で実力の上がったナツ達には足りなかったようで、そっこうで終わるという、たんなる出落ち要員だったかなしいガララワニである

・・・

・・・・・・・・・・・・・

ショウブ達はリンゴの森にきている。リンゴは顔がついてるが

ナツ「なんだ、このリンゴ…」

グレイ「顔がついてやがる…」

ショウブ「ビックリアップル。ビックリすればするほどうまくなる不思議なリンゴだ。結構簡単に驚くが、一般人には難しい。魔法でも見せれば驚くんじゃねえのか。値段は定められた、レベル１００まであるビックリレベル×ｙ万円となってる」

エルザ「ほう。ならば、換装」

エルザが鎧に換装すると、ビックリアップルの諤が外れ目を見開いている

ショウブ「レベル３５ぐらいか」

エルザ「なに！？」

ナツ「火竜の鉄拳！！」

手に炎を纏った強力な一撃をくらって吹き飛ぶどころか塵になったのを見て近くのビックリアップルの顔が少し青くなった気がする

ショウブ「レベル４０といったところか」

ナツ「どうだエルザ！！」

エルザ「ぐっ」

グレイ「氷刃・七連舞！！」

氷の刃による連撃で氷づけになったビックリアップル、その強靭な生命力で氷の中でプルプルしている

ショウブ「レベル４９」
グレイ「どうだー！！」
ショウブ「まあ、一撃だとこのぐらいか。もっと連続したこうげきが必要だな。グレイのは氷ついて逆に驚けてなかったしな」
ウェンディ「じゃあ、天竜の咆哮！！」

咆哮による一撃とその衝撃による強い突風が起きる、そこにさらに天竜の咆哮をし、まるで竜巻の光景になったことで、ビックリアップルは顔を青くし、ガクガク震えている

ショウブ「レベル６６」
ウェンディ「やった！」
『な、なに…』

ウェンディに負けたのがショックだったのか倒れた３人

ショウブ「ついでだし俺もやっとくか。七龍」

さまざまな属性魔法で作られた龍はショウブの周りに集まり八岐大蛇がごとく陣取っている。そしてその龍による咆哮でビックリアップルは顔を青くし、体中から汗を出している。心なしか少し歪んでいる気がする

ショウブ「レベル９０ってところか」
ナツ「すげ―魔法だな！！」
グレイ「俺達じゃ真似できねえ！！」
エルザ「相変わらずすごいな」
ウェンディ「凄い魔力！！」
ショウブ「さてあいつ等のためにもう少しとってくか」

・・・・・・・・・・
ルーシィ「やっと帰ってきた」
ハッピー「遅いよナツ」
シャルル「いつまで待たせるのよ」
ショウブ「ごめんごめん、いま作るからまっとけ」

ショウブ「さ、まずはビックリアップルだ」
ルーシィ「なにこのリンゴ…」
ショウブ「ちなみに驚いてるやつほどうまいぞ」
ハッピー「あ、本当だ―！！」
シャルル「おいしいわね」
ルーシィ「ってもう食べてるし～！！」
ナツ「おお、うまい！！」
グレイ「氷漬けで食いづらいな」
エルザ「３０でも以外とうまいものだな」

ウェンディ「わぁー、おいし～！！」

ショウブ「次、フグ鯨の刺身」
ナツ「うぐぐ、フグ鯨め…」
ハッピー「どうしたのナツ？」
シャルル「フグ鯨をいっぱいだめにして、それでくやしがってるのよ」
ショウブ「ほう、ならお前だけフグ鯨捕ってくるか？」
ナツ「いえ、なんでもございません！！」
ルーシィ「うわあ」

ショウブ「はい、ガララワニのステーキ」
ナツ「うめぇえええええ！！」
グレイ「タラバガニのような味！！」
エルザ「霜降り肉の様な味！！」
ウェンディ「ん～～！！」
ルーシィ「幸せ～」
ハッピー「おおー！！」
シャルル「おいしい」

ショウブ「デザート、虹の実ゼリー」
ナツ「！！」
グレイ「口の中で味が三回変化した！！」
エルザ「凝縮マンゴー３００個の甘み！！」
ルーシィ「ときどき広がる酸味はレモンやキウイ以上！！」
ウェンディ「また味が！！」
ハッピー「また変わった！！」
シャルル「ろ、六回も味が変わるなんて…」
ショウブ「ああ～うまい～～（泣）」
『『幸せ～』』

・・・・・・・・・・・・・
ルーシィ「おいしかったー」
ハッピー「うんうん」
シャルル「ほんと」
ショウブ「久しぶりの客人だしこの前はもてなせなかったからそのお詫びに、虹の実のジュースと特殊な方法で作った特製びっくりレベル１００のビックリアップルを一人一個づつくれてやる」
ナツ「いいのか！！」
ショウブ「ああ、売るも食うも捨てるも自由だ」
エルザ「売るなんて勿体ない！！」
ナツ「食う！！」
グレイ「一択だ！！」
ウェンディ「んふふふ～♪」

ちなみにナツはギルドで自慢して結果大騒ぎになった

花咲く都・クロッカス

・・・・・・・・・・・・・・・

ロギア「おいショウブ！！どういうことだ！！」

ショウブ「あ？」

合宿中、ギルドで放置されていた、ロギアことアクノロギア。天浪島で仲間になったまま力を抑えるためショウブに力を抑える術を使われていた（ちなみにレビィやフリードはその術式を見てショウブに迫って吹き飛ばされた）。家にも行ったが合宿の最中っはギルドの仲間と仲良くするためにもショウブが預けていた。だが結局放置されっぱなしでさらにそのままナツ達と家で食事をするという始末。ロギアは怒っていた。

ショウブ「まあそのことは謝る、すまんな。てか、大魔闘演武の開催する町であるこ「クロッカス」で騒ぎを起こすと面倒だからやめろ。今度グルメ界の食いもん食わせてやるから」

ロギア「わかった！！本当に食わせろよ！！嘘だったら承知しないぞ！！」

ショウブ「へいへい。ほれ、スキマの中入ってな。中にあるのは読んでていいぞ。ただし暴れるのは禁止だ。暴れたら魂をあの世に強制転移させるからな」

ロギア「イエス、マイ、ロード。絶対に暴れません！！」

そう言ってロギアはスキマに入って行った

ルーシィ「魂を強制転移…」
グレイ「やっぱすげーな…」

ルーシィとグレイが関心しているとナツが口を開く

ナツ「そういえばよー、お前やっぱり大会出ないのか？」
ショウブ「ああ、俺が選手として出たら誰も勝てんからな。妖精の尻尾の大会出場メンバーに入ればそこそこと楽しめそうな奴がいる思ったのにな。残念だ」
エルザ「それよりグルメ界とはいったいなんなのだ」

やはり食いついてきたエルザだ。前回の後ビックリアップルがグルメ界のものだといったらこのありさまだ

ショウブ「いい加減しつこいわ。で、グルメ界ね。まずその前に捕獲レベルの話ね。捕獲レベルは生息地や獰猛さ、その猛獣の強さなどから決まる。レベル１ならそこらの魔道士でも倒せるな。レベル１０ぐらいは討伐クエスト出てるやつ数人で狩れるな。ただレベル５０になるとＳ級魔道士がいる。レベル１００は腕のたつＳ級魔道士が５人以上ってところだ。その捕獲レベル１００以上のやつがゴロゴロいる。すごいのは１０００以上ある。捕獲レベル百っていうとまあ、Ｓ級魔道士が百ぐらいいるかな。１０年クエストに行ける奴なら５人くらいでいいんじゃね。それからグルメ界の環境。毒の雲に５０度以上の超高温の気温、隕石の雨に通常の二十万倍ものスピードで年を取る洞窟、さらにさらに普通の２００倍の重力がかかる森などふざけた場所だな。まあうまいもんがいっぱいあるから住む場所を追われた猛獣もめったにグルメ界からでることはない。さ

らにグルメ界は八つのエリアに分けられ、それらのエリアを支配するとてつもなく強い猛獣が一匹づついる。それを八王という。八王は最低捕獲レベル２０００。現在八王で一番強いと言われる猛獣の捕獲レベルは…６６００、だ。旨いもんがたくさんあり、危険で普通では考えられない場所、それがグルメ界だ。ほらこの話は終わりだ。さっさとマカロフ達を探すぞ。」

ショウブが話を切り上げマカロフをさがそうとする

マカロフ「やっときたかお前達」
エルザ「マスター」
マカロフ「参加の手続きは済ませてきたぞがーっはっはっはっはっは……妖精の尻尾の力、見せつけてくれるわい」

住人「だーっはっはっはっは」
住人「妖精の尻尾？あいつらが？」
住人「万年最下位の？」
住人「どうせ今年も最下位だろ」
住人「優勝は剣咬の虎で決まりさ」
ショウブ「……」
ナツ「うぬぬぬぬぬぬ」
マカロフ「笑いたい奴には笑わせておけい」
ショウブ「いや、俺のきがすまんな。ハハハハッハハハハハハハ」
マカロフ「…ショウブ？」
ウェンディ「落ち着いてショウブ！！」

住人「ははははは！！気が済まないって！！」

住人「万年最下位のお前らになにができるんだよ！！」

ショウブ「そうだな、たとえば…ブリザードクロック」

次の瞬間、大量の魔法が住人をカスっていった。住人の頬を軽く切り、焼く

ショウブ「俺にとっちゃお前らなんぞなんの価値もない。これは俺が生きることに必死で知り合いというのすらあまり作らなかったのが原因だ。普通の奴とは違うし、お前らに押しつける道理もない。ただ仲間を傷つけないように加減しただけだ。じゃなきゃ今ごろお前らは跡形もなく消え去っていただろうよ。それから最弱っていってるが、お前らは勝てるのか？妖精の尻尾のメンバーに。相手をバカにするなら最低限、相手に勝てるぐらいにならないとな？」

住人『あ…あ…あ…』

ショウブ「あーすっきりした」

ナツ、グレイ「うんうん」

マカロフ「すっきりしたじゃないわ！！」

ショウブ「まあまあさっさと次行こう」

ショウブが魔法を発動する

マカロフ「たくっ。よいか、三十万ジュエゴホン！！フィオーレーのギルドになる為に全力を尽くすのじゃ！！でなければワシらの命を救ってくれた初代に顔向けできん」

『うん』

ショウブ「じゃ俺もうよう済んだし。ちょっと依頼を進めとくわ。本当はウェンディとシャルルと回るつもりだったんだが、早めに終わらせないと面倒そうだしな」
エルザ「頼んだ」
グレイ「てか最近ショウブが妙にイチャつくようになったきが」
ショウブ「まぁいいじゃん。グレイは早くジュビアを何とかしないと後ろから刺されても知らんぞ」
グレイ「怖いこと言うな！！」
マカロフ「…依頼？」
エルザ「それよりマスター競技は一体…」

・・・

ショウブはエコーロケーションの範囲をさらに広める

ショウブ「ん、これは……扉？あいつの魔力が感じられるが、これはあいつが作ったのか？この扉の奥にはなにもないのに。空間魔法の一種か、時魔法の応用か。それにしてもなにか大きなものが出入りするような。今の時代、大きな飛行船があるわけでもないし。地下からどうやって出すって話だ。となると生物か？だがそんな大きな生物なんて……ああ、いたな。そうか、「あの生物」がいる。強大な力と巨大な体を持つ、今はないものとされているあの生物。だがあんなもの呼びだしたら国が滅ぶぞ。扉自体の魔力から考えるにあきらか一匹以上は出る。国はなにを考えてるんだ。考えても仕方がない。あの扉について調べなければ。黙示録や聖書になら少しは載っているはず。最悪俺達四人で管理しているあれ関連の本の魔術を使ってでも」

ショウブはスキマを開き中に入る

ショウブ「おい、ロギア。今すぐ隙間からでてナツ達と合流しろ」
ロギア「断る。まだこのまんがとやらを読んでいたい」
ショウブ「この際後で返すならいい。ナツ達の所にはスキマを開いてやるから、出ていけ」
ロギア「なにをそうあせっている」
ショウブ「あせっていない。ただあれ関連の本を読むことになるかもしれんからな。お前を廃人にするはけにはいかん」
ロギア「俺が廃人になるって、どんな本だよ。それから俺の場合廃人じゃなくて廃竜じゃねえか」
ショウブ「そうか、じゃさっさと漫画もっていきな」

ロギア「なっとくいかんが、廃竜はいやだからいかせてもらおう」

ロギアは大量の漫画を持って、スキマから出ていく

ショウブ「よし、まずは黙示録か。どこにおいてあったか」

ショウブは図書室の扉を開け、本を探し始めた

・・・・・・・・・・

けっきょくあれ関連の本を探しても殆ど見つからなかった

ショウブ「結局わかったのは、扉の名前はエクリプスで時を渡る力を持つ扉、ってだけか。これだとあれ関連を引っ張り出した意味がない。また宇宙的狂気にのめりこんだだけだ。はぁ、ナツ達の所に行くか。それからいつ戻ったか知らんが、さっさと行くぞロギア」

ロギア「む、やはりわかっていたか」

ショウブ「当たり前だ」

ショウブはスキマを開く。座標を間違えたのか空中に隙間ができた。スキマを除くとナツとハッピーとルーシィ、そして型の紋章から剣咬の虎のメンバーと思われるもの二人と。おそらくハッピーと同じエクシードであろう猫二匹。金髪がスティング、黒髪がローグ、茶色の猫はレクター、気ぐるみを着た猫がフローと言うらしい。面白そうなので見ていることにした

スティング「アクノロギアと赤い竜」

「「「「「！！」」」」」
スティング「ドラゴンを倒せなかった滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）でしょお。それって滅竜魔導士の意味あんのぉ」
ナツ「ああ！」

ショウブ「たしかに」
ロギア「うむ」

スティング「これでも昔はあんたにあこがれてたんだぜ。ちなみにこいつはガジルさん」
ローグ「同じ滅竜魔導士として気になっただけだ」
ナツ「滅竜魔導士！？お前ら二人とも」
スティング「真の滅竜魔導士って言ってくんないかな。俺たちなら二匹ともを倒せる」
ルーシィ「あんた達あの二匹を見たことないから言えるのよ！」
ハッピー「そうだそうだ！！」

ショウブ「ロギアより強いとか」
ロギア「俺を舐めすぎだろう。あの人間と猫ども」
ショウブ「てか黙示録の龍って俺ら四人でやってやっと封印したってのに、昔よりは強くなってるが、あいつ等だけであの龍狩るとか笑い話にもならん」

レクター「頭の悪そうな猫ですねぇ」
フロー「レクターは頭いいよね」
ローグ「見たかどうかは関係ない」
スティング「様は滅竜魔導士としての資質の差」

レクター「私が説明しましょう。ナツ君などは、竜(ドラゴン)から滅竜魔法を授かったいわゆる第一世代といいます。おたくらのラクサス君や六(オラシオンセウス)魔将軍のコブラ君は竜の魔水晶(ラクリマ)を体に埋め込んだ第二世代。そしてスティング君とローグ君はあなたの様に本物の竜を親に持ち、竜の魔水晶を体に埋めた、ハイブリットな第三世代」

ナツ「第三世代！？」

レクター「つまり最強の滅竜魔導士！！」

ナツ「最強の滅竜魔導士…」

レクター「第一世代と第三世代ではその実力の差は雲泥の差。お話にもなりませんよ」

ショウブ「そんな世代差があったのか」

ロギア「ナツ達とあいつ等の実力はあまり変わらんと思うがなぁ」

ナツ「お前達も、777年に竜がいなくなったのか」

スティング「まあ、ある意味でわ」

ローグ「はっきり言ってやる。俺達に滅竜魔法を教えた竜は、自らの手で始末した。真の滅竜魔導士になるために」

ルーシィ「竜を…殺した！？」

ハッピー「人間が…竜を」

ナツ「親を、殺したのか」

ロギア「……」

ショウブ「調子に乗りすぎだよなぁ。十分見たし、行くか」

ショウブとロギアはスキマからでる

ショウブ「ほら、もういいだろ。さっさと行くぞ」
ナツ「ショウブ」
ルーシィ「ロギア」
スティング「あんたが噂のショウブ？ジュラに勝てるっていう」
ショウブ「どこの誰だそんなこと言った奴。たしかにあの程度の奴なら勝てるが戦った事など一度もない」
スティング「やっぱり嘘かぁ」
ローグ「所詮は雑魚だ」
ルーシィ「ちょ、そんなこと言ったら」
ナツ「お、おい、今すぐ謝った方がいいぞ！！」
ハッピー「そうそう！！」
レクター「嘘付き相手に下げる頭はありませんよ」
ショウブ「…そうか。ふふふ、俺にここまでつっかかってくる人間はナツ以来だ。最近は全力で戦える奴がいなくてスッキリしてなかったしな、ちょうどいいか。おい、人間、あと猫、お前ら俺に喧嘩売る意味わかってるのか。俺はナツ達程優しくねえからさ……殺すぞ」
「「「「「ッ！！」」」」」

威圧をしながら低い声でいう。その凄まじい威圧を直接浴びたスティング達は一歩後ずさった

ショウブ「そうそう、天浪島での咆哮、あれアクノロギアのじゃねぇから。アクノロギアは俺が倒して今ここにいるし。てかアクノロギア殺すとか調子に乗るなよ。思わず笑いそうになった」
ロギア「俺を殺すなどお前らでは無理だ。少なくともこの速度についてこれないようならっな！」

ロギアは亜音速で動きだす。周りには突風が吹く

ロギア「これは半分の力もだしていない。もっと力をつけろ」
ショウブ「早くなったなロギア。今のは５０ほどか」
ルーシィ「だいたいわかるけど、なにが」
ショウブ「ロギアが回った回数。ほら帰るぞ面倒だし転移でいいよな。ほい転移」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~15987

元吸血鬼の魔道士生活（休息中）
2016年08月16日　18時51分発行